No.45
2026.4.1

テミス（法学部報）

Themis

CONTENTS

贈る言葉
特集「私のワセメシ」
永きにわたり
私は法学部生
はじめまして
教員紹介

早稲田大学 法学部

大学、そして、法学部での学びはどうあるべきか

法学部長　田村達久

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。早稲田大学法学部にようこそ！　また、卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。法学部の教職員を代表してお祝いを申し上げます。

新入生のみなさんは、高等学校入学時点においては、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症対策の影響もほぼなくなっていて、その面からの制約を受けることなく、様々な活動に熱心に取り組むことができたと思います。そして同時に、弛むことなく勉学にも励まれて早稲田大学法学部に合格し、入学されてきました。心よりお祝いし、かつ、歓迎いたします。

卒業生のみなさんは、入学してからしばらくの間はなおコロナ禍の影響を直接に被りました。１年生の春学期は外国語の授業を中心にオンライン形式で受講となりましたね。そして、たしかに、秋学期からはすべての授業が対面での受講とはなりましたが、それでもマスクを着用しての大学生生活がなお続きました。大きな制約を課された大学生生活の始まりとなったのでしたね。しかし、そのような状況にあっても、将来を見つめて弛まぬ努力を続けられた結果、めでたく卒業の日を迎えられました。社会に出ますと、思いもしなかった様々な難事に直面します。この間の未曾有の困難に立ち向かわれて得られた経験は、必ずみなさんの将来に活かされるでしょう。私たち教職員一同、自信を持ってみなさんを送り出すとともに、あらためてのエールを送ります。

さて、新入生に贈る言葉を述べることがこの欄の本旨ですので、新入生のみなさんのことを念頭において話を進めましょう。

高等学校までの間に学びの場がどうあるべきかを少なくとも意識的に自ら問うことはなかったでしょう。そこで、今回は、この小稿のテーマをみなさんが卒業するまでに一度は答えてほしい「問い」として提示し、贈る言葉としたいと考えます。なお、私も、書棚から上山安敏ほか編訳『ウェーバーの大学論』（木鐸社、1979年）を取り出して改めて考えてみることにしました。この本は、ドイツの社会学者であるマックス・ウェーバーの関係論稿（ただし、ほとんどが具体的な出来事に関係して執筆された時務論稿）を翻訳して編集したものです。マックス・ウェーバーの名前には、高等学校の倫理・社会や世界史の教科書または用語集などで出会っていることでしょう。

大学を、学問を生み出しかつ教授する場と考えたウェーバーは、その本のなかで次のことをいっています。すなわち、「たしかに大学は、受講者に世界観を知ることを教えはする」が、「世界観を教えてはならない。…事実やその実在的な条件・法則・連関を分析し、また概念やその理論的な前提・内容を分析する所である。反対に、大学は、何がなされるべきかを教えないし、また教えることもできない。なぜなら、これは究極的な個人的価値判断、つまり世界観の問題（ザッヘ）なのであって、学問的命題のように『論証』しようと思えばできるようなものではないのだから。」（前掲書57頁）と。

これによれば、価値判断を伴うどうある「べき」、あるいは、どうす「べき」の内容それ自体は、大学では―したがって同時に、大学教員は―教えてはならないし、教えることはできないということになりましょう。それでは、このことを法律学に当てはめるとどうなるでしょうか。

ウェーバーは、別の文脈においてですが、「そもそも法律は作られるべきであるかどうかとか、これこれの規則は設定されるべきであるかどうかというような問いにたいしては、それ〔法律学―執筆者註〕はなにごとも答えないのである。」（ウェーバーの大学論を知るうえで不可欠とされる尾高邦雄訳『職業としての学問』（岩波文庫）46頁）と述べています。

これらをあわせてみると、ウェーバーによれば、大学の法律学の教員は、その授業において、いわゆる立法政策的な事柄を講じてはならない、講じることはできない、ということになるでしょうか。あるいは、その講じ方が問題となるにとどまるでしょうか。はたしてみなさんはどう考えますか。法学教育はもちろんのこと、外国語教育をはじめとする語学教養教育も重要な柱としてしっかりとしたカリキュラムを組み立てている早稲田大学法学部における学びを進めながら、掲げました「問い」を折に触れて是非とも考えてみてください。

特集

私のワセメシ

おいしい店がいろいろあります

長谷部恭男

早稲田近辺の飲食店で印象に残っているのは、まずはラーメンの**厳哲**である。筆者が早稲田のロースクールに着任したのは、2014年の４月であるが、ほぼ前後してこの店がリーガロイヤル・ホテルの向かいに開店した。当初は週１～２度のペースで通っていた。薄切り肉醤油というチャーシューメンが大量の青ネギも含めて、ことの他おいしかったことを覚えている。残念なことに、2025年４月に閉店してしまった。

早稲田通り沿いに西口から歩いて５分ほどにある**らぁ麺やまぐち**も有名である。スープは厳哲と似た昆布だしの醤油味である。ただ、筆者の趣味からいうと、少し野菜が足りないかなという感じがある。

厳哲のとなりのパン屋、**イトウベーカリー**は、いまだに健在である。ハムとレタスをはさんだマヨネーズたっぷりのサンドウィッチが絶品である。タルタルフィッシュバーガーもおいしい。

大隈通りのそば屋、**金城庵本館**にもよく通っていた。天ぷらそばが人気である（そうメニューに書いてある）。かつて、テレビ東京のバラエティ番組『モヤモヤさまぁ～ず』で、お笑いコンビのさまぁ～ずが訪れて昼食をとったことがあるほどの名店である。「通っていた」と過去形なのは、コロナ禍以降、少々足が遠のいてしまったからで、先日も「お久しぶりですね」と言われてしまった。

南門前の高田牧舎は、以前は普通の洋食屋であったが、10年ほど前から、本格的な**Pizzeria TAKATA BOKUSYA**へと変貌を遂げた。ピッツァの味はいずれも水準以上で、海外からのお客さんを連れて行くこともあるが、好評である。

早稲田から少し距離があるが、馬場口交差点近くの路地を入ったところにある**蕎麦処浅野屋**にも、時折出向く。冬季の牡蠣そばと牡蠣せいろが名物で、ふっくらした牡蠣のうま味が冷えた身体に染みわたる。

JR高田馬場駅を出て南につつじ通りを100メートルほど進んだ先のビルの２階には、**11区坦坦面**という有名な坦々麺屋がある。菅原道真さんという店主が経営している店で（厨房では中国語が話されている模様だが）、辛さもほどほどでじんわり汗をかくことができる。

というわけで、おいしい店の多いところである。

早稲田で学び、早稲田で笑い、早稲田で食べる――。この街で過ごす人々の活力の源、それが「ワセメシ」です。恩師が愛した名店から、思い出の詰まった意外な一皿まで。先生方のエッセイとともに、奥深いワセメシの世界をご案内します。

ワセメシは愉しい

水町勇一郎

食べるのが好きだ。残りの人生だいたい30年だとして（ちょっと欲張ってる）、１年で約1000食とすると（計算がアバウト）、あと３万回しかご飯を食べられない。あと３万回しかないから１回１回を大切にしたい。よく知らない人たちとありきたりなものを食べる会食を強制されると、俺の大切な人生を返してくれ～という気持ちになってしまう。

その点、近くで好きなお店を選べるワセメシは愉しい。ワセダでの食の歓びをちょっとだけ書いてみます。

まずは、キャトル・フォンテーヌ。正門から早大通りを３分ぐらい歩いて右手にあるお店。オーナーシェフご夫婦で切り盛りされている気持ちのいいビストロ。ランチは1400円で肉料理か魚料理を選べるが、個人的にはパリッと焼いた肉料理。学生はあまり見かけないが、早稲田の先生たちにはときどき出会う。お昼から赤ワインを飲みながらお肉を食べていると、たまに法学部の先生がやってくる。それに備えてなるべく目立たない（死角にグラスを隠せる）席に座らせてもらっている。別に労働法的に悪いことをしているわけではないが、私にも日本人的な意識がなくはない。

和食を食べたいときは、きなり。キッチンオトボケの隣のビルの地下にあるお店。「大人の隠れ家」だとされているが、学生もよくみかける（学生も「大人」じゃないわけじゃない）。特にランチは毎週メニューが変わるお肉定食とお魚定食がどちらもおすすめ。品数が多くお腹いっぱいになる。値段は1300円～1800円くらいとやや高めだが、最低賃金も上がってきているし、バイト代が入ったらぜひ行ってみてください。皆さんが行ったからって私になんかいいことがあるわけじゃない（むしろ行列で入りにくくなるのは避けたい）。

早稲田駅近くにある東京らっきょブラザーズもいいですね。いつのまにか北海道の名物料理になっているスープカレー。その札幌の名店が18年前に東京に進出してきたお店。札幌と同じ、奥深くスパイシーな味を愉しめる。CoCo壱と同じように辛さとかトッピングを選べるのもうれしい。いつもメニューをみながら悩みに悩むが、結局いつもと同じ、定番のチキンスープカレー、辛さ４に、厚切りベーコンとガーリックチップのトッピング。値段は2000円くらいになってしまうが、こういう贅沢をするときに大人になってよかったなあってしんみり思う。CoCo壱でもいつの間にか1500円ぐらいにはなる。

あと、図星の油そば（大人は全部のせ）、わせだの弁当屋（私はギョウカラ）、ファミマ南門店のモカブレンド、リーガロイヤルの中華とかも好きだけど、もう書くスペースがない…

愛と欲望のピザ

本山哲人

年を重ねてくると、昔のことを懐かしく思い出すことが多くなる。早稲田で教えはじめた頃、英語を話す機会を求める学生の要望を受けて、週１回、授業の後に英語で時事問題を議論する集まりを開いていた。最初の２年ほどは学食で食事をしながら英語で議論をしていたが、その後は人数が増え、研究室で行うようになった。遅くまで白熱した議論が続き、そのまま一緒に食事をすることも多くなった。そのとき、皆でよく雪崩込んだのが、高田馬場駅近くにあるコットンクラブである。

そこでほぼ毎回注文していたのが、ハート形の生地にペスト、トマト、プロシュートなどが重ねられた「愛と欲望のピザ」である。ペストの刺激的な味とトマトの新鮮さ、プロシュートの熟成したうまみが絶妙に組み合わさったピザを囲みながら、学生たちの愛と欲望と夢の話に耳を傾けていたことが思い出される。報われない片思いを涙ながらに話す学生、日本を飛び出して海外で活躍する夢を語る学生、就職活動をしながら将来を模索する学生、情熱を注いでいる研究の方向性を相談する学生。コットンクラブのうす明りのなかでも学生の眼差しはいつも輝いていて、そこで彼らと一緒に早稲田祭に屋台を出店することが決まったり、アメリカの法廷劇を翻訳して上演することが実現したりしていった。

“Doest thou think, because thou art virtuous, there shall be no more cakes and ale?” これはシェイクスピアの『十二夜』のなかで、体裁を気にして要領よく、賢く生きる登場人物に対して、発せられる有名な台詞である。ここから“cakes and ale”は人生を謳歌することを示す表現として使われるようになった。同じ『十二夜』には、“Thou’rt a scholar. Let us therefore eat and drink”とも記されている。学者とはほど遠い、お人好しな愚者をおだてる言葉ではあるが、飲み食いをしながら情熱や欲望を語ること、人生を謳歌することは、実は無駄で愚かなことではなく、大学で学ぶ者にとって最も重要なことのひとつである気がしてならない。

先日、30代、40代となった当時の学生たちと集まる機会があった。皆、子育てをしつつ、各々の夢を追い続けている。勤務している法律事務所からアメリカや欧州の法科大学院へ派遣される者、官庁から研究機関への転職を目指している者、海外への転職を検討している者、博士論文を提出したばかりの者。早稲田の学生であった頃の目の輝きと情熱は少しも失われていなかった。彼らと話しながら、新たに「愛と欲望のピザ」を囲むような学生と出会う日はくるのだろうかと考えていた。

永きにわたり

山城一真

早稲田大学創立100周年の年に生まれた私は、21世紀の始まりとともに法学部に入学し、以来、四半世紀のほとんどをここで過ごしてきました。当然、ワセメシも大量摂取しています。

ワセメシについて味を語るのは、無粋というものでしょう。おひとりさまで外食する度胸のない私にとって、大切なのは、メシの隣にいつも誰かがいたことです。ふり返ってみると――、

労働法研究会のゼミ後に行った**串亭**（2001年。以下、下２桁のみ表記）、石塚さん*から勉強の心構えを説かれた**文カフェ**（01）、定期試験後にたらこ・えびスパゲティを食べた**まほうつかいのでし**（02）、煮魚定食を上手に食べるわねとおばちゃんにほめられた**静**（02）、天ぷら定食をあっという間に食べ終わっておばちゃんに笑われた**いもや**（02）、体調を崩した私を気遣って訪ねてきた両親と行った**シャノアール**（03）、「研究とは精神の帝国を築くことだ」と藤岡先生が熱弁された**楠亭**（04）、田山ゼミ司法試験合格者祝賀会が毎年開かれた**VIA**（04）、研究指南の後に大澤さん*が誘ってくださった**学情喫茶**（07）、法学研究科の先輩たちと研究報告の慰労会をした**そうせき**（08）、論文が書けないと中川君*に泣きごとを言った**ふじや**（08）、景気づけにと中川君と土用に行った**すず金**（09）、「隠れた名店発見！」と中川君と通った**なかの**（10）、初めての授業を終えて中川君と行った**もりや**（11）、ストフェル－マンク教授夫妻を後藤先生と一緒にご招待した**松下**（11）、ここには書けない**焼鳥はちまん**（12）、ゲスタン契約法読書会の打上げをした**montée**（14）、法科大学院入試に失敗した教え子を慰めた**長岡屋**（16）、「これが本物のrestaurant japonaisだぞ」とフロラン君を連れて行った**たかはし**（23）、瀬川先生との昼食にいつも予約する**キャトル・フォンテーヌ**（24）、つい先日、ゼミのOBOG会をした**高田牧舎**（25）……ほかにも挙げきれないほどのお店に行っていますが、もういいでしょう。

こうして、相手や場所を変えながら、ワセメシを食べてきました。人寿125年、これからもずっと、ワセメシを食べ続けていきたいです。

＊石塚さん：勉強の手ほどきをしてくださった先輩
＊大澤さん：巻末の教員紹介を参照
＊中川君：本誌36号（2017年）４頁を参照

永きにわたり

自己、他者、そして世界の探求

教授　谷　昌親

降りそそぐ陽射しに夏の訪れを感じる時期にさしかかっていた。パリに留学して三年が経ち、そろそろ帰国を考えねばならない状況にあったわたしは、穏やかに晴れたある日、パリ左岸のオデオン界隈を歩いていた。向こうから、スカイブルーのスーツに身をつつんだ老人がこちらにやってきた。その姿を見て、わたしはそれが作家のミシェル・レリスだとすぐに気づいた。声をかけたいという気持が湧いてきたが、結局わたしはそのまま彼とすれ違い、振り返ることすらしなかった。

その後も、折にふれて、この一瞬の出会いのことを思い出した。話しかけていればと悔やむ気持がまったくなかったと言えば嘘になるが、尊敬と共感の念を抱きつつその著作に接していた作者にあのように偶然すれ違うことができたという事実が、むしろわたしにとっては貴重な体験になっていた。

自伝的エッセの書き手であり、民族誌学者でもあったミシェル・レリスは、友人であったマルチニックの詩人エメ・セゼールに言わせれば、「自分自身を探索する人間」であり、「他者の探索をする人間」でもあり、さらには「存在と世界を探求する人間」だった。特筆すべきは、レリスにとってその三領域での探求はばらばらにおこなわれるものではなく、通底していて、そのため彼は、日常生活の些細な事柄への気づきを大切にしていたということだ。そのレリスの著作の翻訳を、図書館ではじめて手にしたときの、そのハードカバーの造本の感触をいまでも思い出す。そして彼の著作との出会いが今度はわたしに、自分自身を、他者を、そして世界を探求する道を開いたのであり、その歩みの先に、あのパリの街角での出会いが生じたとしか考えられない。

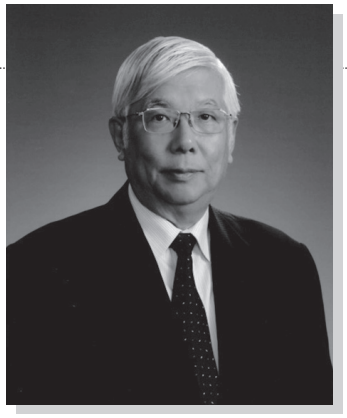
自分が研究者のはしくれとしてどれだけの仕事ができてきたのかと振り返ると、むしろ暗澹たる気持にもなるが、まがりなりにも大学人として暮らし、研究にそれなりにたずさわってくることで、あのレリスとの出会いとも言えぬ出会いを反芻してこれたのだと思う。大学での過ごした日々をとおして、あくまで自分の研究やそれに基づく授業をとおしてではあるが、わたしもレリスに倣い、自己を探り、他者を探り、そして世界を探ってきたつもりだ。そうしたなかでさまざまな出会いもあったわけだが、そうした出会いのひとつひとつが、わたしにとってはもちろん、相手にとっても、他者に関心を抱き、そのことで自己を振り返り、さらに世界のあり方に思いを馳せるといったものに少しでもなってくれたのであれば、と願うばかりだ。

自己、他者、世界の探求を通底させるには、近道など存在せず、迂回しつつ周囲の風景の細部を見逃さぬようにするしかない。大学という空間は、現実にはさまざまな制約にしばられているが、そのようなかぎりない探求へと向けた出会いをもたらしてくれる場なのだとあらためて思う。

2025年度 退職教員挨拶

能力×時間の最大化を

教 授　道垣内 正人



早稲田大学には48歳で移籍してきました。法科大学院の創設時です。担当した国際関係法（私法系）は、司法試験受験者のうち約10％が選択する科目です。また、法学部では導入演習・国際民事訴訟法を担当しましたが、合わせても毎年50名くらいの受講者でした。したがって、在籍中に接することができた学生の方々の数はごくわずかですが、それでも、思い出はたくさんあります。それらを総じていえば、皆さんの発するまぶしい光を浴び続けたように思います。教室は、かぐや姫の入った竹だらけの林のようでした。

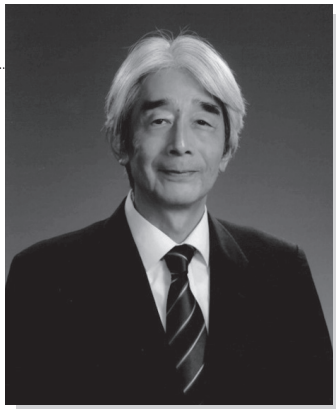
皆さんには一人ひとり固有の能力があります。他方、共通しているのは、これから先の時間の長さです。この掛け算、すなわち「能力×時間」のポテンシャルの大きさが皆さんを光り輝かせているのだと思います。とはいえ、その値はまだまだ可変的です。この学生時代に「能力」を磨いてそれを大きくしてください。他方、何もしないでも時は過ぎ去っていきます。この式に代入することができる「時間」は有意義な時間だけです。皆さんには今、豊富な時間があるはずです。卒業後のことを考えれば、自由に活用することができる時間が今ほどある時期はないと思います。たとえば、まだ可能であれば、法学以外の専門家の授業を受けてみて視野を広げてください。当たり外れはあると思いますが、少なくとも、オンライン上の同じような情報に漫然と接している時間よりはよほど有意義な効果を得られると思います。

約50年前は私も皆さんと同じ学生時代を過ごしていました。その頃は、時間は豊富にあり、先には果てしない時間があると思っていました。そのような私が70歳を迎え、退職の日を迎えました。本棚には未読のままの書籍が数多く並んでいます。それらは活用される企画を持っていたはずです。にもかかわらず、全くうかうかしていました。いつかはそれに取り掛かろうと思いながら、その「いつか」は今日まで訪れず、これらの書籍はページをめくってもらうのを空しく待ち続けたまま、何らかの処分をされる運命にあります。平均余命が伸びているとはいえ、とてもそれらを有効活用する時間は残っていないからです。

ぜひ、「能力×時間」の値を最大化して、皆さんが70歳になって振り返った時、歴史に何かを刻んできたという人生だったと思うことができるようにしてください。そうすれば世界はきっとよりよくなっていると思います。

想像力がなければ思考は無意味となる

教 授　中島　徹



法学部生に想像力？法律学の習得に必要なのは論理的思考力のはずだ、と思うかもしれません。もちろん、法律学は既存の条文や法概念等を前提とするので、論理的に推論し考え抜く力は必要ですが、それだけで足りるでしょうか？

私は、法学部に入学して分厚い六法や判例集を目にしたとき、「ここに正義がある」と信じて疑いませんでした。私がすべきことは、そこに書かれていることを、解決すべき課題にあてはめること、そうすれば自ずと「正解」に到達する、と。

何とも素朴な思い込みで恥じ入るばかりですが、あてはめにより出てきた結論は、これが「正義」？と疑問を感じるものもありました。同性婚や夫婦別姓を政府が認めないのは憲法違反か、という問題もそのひとつです。

憲法24条は、「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し」と定めているから同性婚は認められない、また民法750条は、「夫婦は、……夫または妻の氏を称する」と規定しているので、いずれも法の下の平等に反しない、と法的に説明することはできます。

でも、憲法の文言は、親の同意なしに結婚できなかった帝国憲法下の制度廃止を念頭に置いたもので、同性婚を排除することを目的としてはいません。また、夫婦同氏強制により９割以上が夫の氏を選択する（せざるを得ない）現実に苦しんでいる人がいることを想うと、あてはめだけで「正解」にたどり着けるとは限らないことがわかります。

ここでの「想像力」は、他者の意見や現には自分の身の回りにない状況を想い描くこと、という意味で用いています。なぜ同性婚や夫婦別姓を認めることができないのか？家族が崩壊し、社会が変わってしまう？同性婚で少子化が進む？ 2025年11月に東京高裁は「男女の性的結合関係による子の生殖が……国民社会を維持するうえで社会的承認を受けた通常の方法」だから、同性婚を認めないことは合憲であると論じました。そうなのでしょうか？

夫婦同氏強制は今や日本だけの制度ですが、他国で家族は崩壊したのか？社会は変わってはならない？そう信じるのは個人の自由ですが、いうところの「国民社会」は、一方的信念の押しつけで成り立つものなのでしょうか？

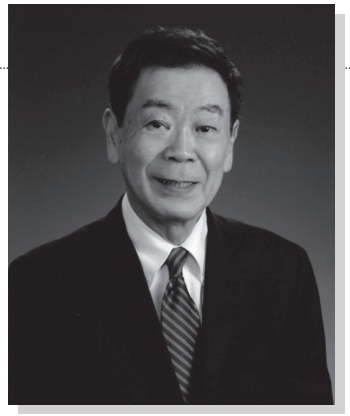
世界終末時計の残り時間が、過去最短の85秒となった2026年。「明日には目が見えなくなるかもしれないと思って、世界を見てください」（ヘレン・ケラー）、想像力とともに。

早稲田大学に入学以来52年、ワセダはずいぶんと変わりました。概ねよい方向に、です。変化を恐れず、次の世界を想像＝創造しましょう！

永きにわたり、ありがとうございました。

境界へ

教 授　原田 俊彦



僕は1975年4月に本学部に入学し、それからの50年以上を本学部のお世話になった。人生のほとんどすべてである。狭い世界しか知らないのかもしれない。けれども本学部での勉強を通じてこの世界を理解しようと努めてはきた。

僕は学問あるいは何らかのジャンルの周縁に境界へと絶えず向かおうとしてきたようだ。僕は法の歴史学、とりわけ、古代ローマの法とその近代世界への受容を勉強してきた。この研究分野からして、法学の周縁にあり、他学と常に境界を接している。僕たちの世界とは異なるかもしれない古代ローマ世界を総体として理解しその世界にその法を埋め込むには、さまざまな学問領域の成果を摂取しなければならない。歴史学、人類学、宗教学、さらには、現象学、現代記号論、等々、渉猟すべき学問分野に際限はなかった。そして、古代ローマ世界の近代への受容を総体として捉えるために、例えばパルプ・フィクション（タランティーノじゃなくてラヴクラフトとかですね）にさえ素材を求めようとしている。

こうした営為を本学部は僕に認めてくれた。最近も講義やゼミで、例えば、近代科学の物理法則に基づく論理、それには依存しない論理、いずれも等価であると仮定して、メインストリームにあるだろう近代科学（とりわけ19世紀的科学）的世界観を相対化しようとした。それは多様な世界認識の存在を確認する試みであり、本学部は狭い世界では決してなく認識の広野を拓いてくれる、そのことを伝えようとする試みでもあった。学生さんに伝わったかどうか、それは別なのだけれど。

むろん、法学部の本領は法解釈学にある。しかし、それを勉強する基礎には他の学問的成果の摂取が必須と思う。本学部のカリキュラムは、語学科目、一般教養科目、これらを通じて、この要請に遺漏なく応えてくれる。僕のような志向・嗜好を持つ学生さんにも、辺境あるいは境界領域にある法学科目がさまざまに設置されている。

学生さんにはこうした学問環境を大いに活用してもらいたい。卒業生の皆さんには十分に役だったはずだ。周縁に境界へと常に向かうべきとはいわない。しかし、それを意識することで、世界の全体を認識しようとする志向だけは欠かさないでもらいたいと思う。

50年以上お世話になった本学部へ心からお礼申し上げたい。そして、学生さん、卒業生の皆さんに多様な世界が広がるにちがいないことを切に願っている。

反省点さまざま

教　授　**ローリー　ゲイ**

今年度末で選択退職するローリー　ゲイ（Gaye ROWLEY）です。法学部で英語を中心に二十五年間授業を担当してきました。皆様には長い間お世話になりました。

授業は「英語を」と書きましたが、実は「英語を教えた」ことは殆どありません。法学部の英語教育方針は「英語で教える」ことが徹底されて久しいからです。一・二年生の授業で教科書を使ったことはありますが、教員自身にも学生にも面白くなく、英語で書かれた本、学術論文、新聞や雑誌の記事を学生と一緒に読み解き、内容について話し合うことの方が皆さんのレベルに合っているし、役に立つと考えるようになりました。かなりテクニカルな要素があるAcademic Writingの科目だけ教科書を使い、その細かさで学生を毎年うんざりさせてしまい申し訳なく思っています。

ここ数年、早稲田大学の掲げた目標「Realizing a carbon neutral society/カーボン・ニュートラル社会の実現」に沿って一年生の授業のテーマを環境問題にしてきました。Bridge（春学期）の授業でBella Lackというイギリス人女性が19歳の時に著した『The Children of the Anthropocene』（Penguin, 2022年刊行）を読み、Gate（秋学期）の授業では「日本における再生可能エネルギー政策」や「ファストファッションが及ぼす環境問題」について主にオンライン記事を読み、解決方法を探って議論をしてきました。

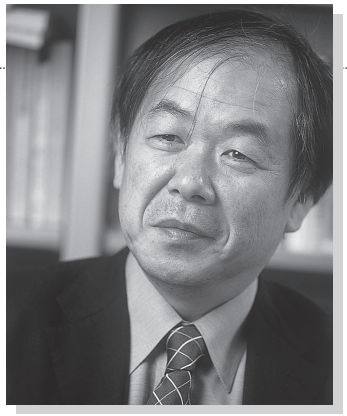
二年生のTheme授業では春学期は「Apology」、特に過去の出来事（原住民政策、水俣病、日系アメリカ人の強制収容など）を謝罪する過程、秋学期は「Gender and History」、学生が勉強したいテーマを取り上げてきました。

日本研究をしている者としてどうしても「日本の場合はどうなっている」「なぜそうなっている」という質問に学生たちに答えてもらいたく、現に殆どの学生は国内においても海外においても「日本人」として見られ、扱われ、いやでも日本の言い分を聞かれ、責められることにもなるでしょう。ですから教育目標として「日本はどうなっている」「なぜそうなっている」を英語で説明できるようになることは悪くないと自分に言い聞かせてきました。ですが、学生から見ればその視点は時にはつまらなかったのではないかと最近気づき、反省をしています。せっかく非日本人の教員にあたったのだから、海外ではどうなっているのかを詳しく教えてもらいたいのは自然、もしくは当たり前だったのでしょう。むしろ私こそが「日本はどうなっている」「なぜそうなっている」について学生から多く学んできました。

ですから学生の皆さんと一緒に勉強できたこの二十五年間は実にかけがえのない経験でした。反省しつつも心より感謝しています。

テミスの落し物：学生の皆さんへのメッセージ

教 授　和田 仁孝



私は、法ないし法律家の視点からではなく、法の名宛人となる紛争当事者の視点から分析を行ってきました。ロースクールでは、法の習得が中心課題となりますが、私の授業では、その対象となる当事者の視点から、法の意義と限界を検討してきました。

それを象徴するのが、私がよく言及する「テミスの落とし物」という言葉です。女神テミスは、近代以降、正義や法の象徴として扱われています。ご存じのように、その手には、衡平な判断をもたらす天秤と、それを実現するための力としての剣が備えられ、目には対象者の名声や貧富などの属性を見ないための目隠しが施されています。

この像の含意は、しかし、それによって裁かれるものの目から見れば、また別の意味をもって現れてきます。正義を測る秤としての天秤は、女神テミスの秤に他なりません。裁かれる当事者にとっては、別の秤こそが、本来、用いられるべき秤と考えられているかもかもしれません。こうした異議申立てを抑制するために、テミスはもう一方の手に剣を握っています。当事者がどのような秤を念頭に置いていようとも、テミス自身の天秤による計測を正義として貫徹するための剣です。

また、目隠しは、個々の当事者の属性を超えた平等な法の適用をもたらすとされますが、当事者が裁きの神テミスに、その双眸で見てほしいもの、受け止めてほしいものを、実は見落としてしまう結果をももたらしてしまうかもしれません。

すなわち、当事者から見て、テミスは自分が見たいものだけを見て、自分の持つ天秤のみで計測し、その結果を力によって抑圧的に実現しようとする傲岸な神にほかならないのかもしれません。テミスは、何か大きな落し物をしているのではないでしょうか。

さらにいえば、テミスは本当に言われるとおりの振舞いをしているのだろうか。目隠しの端から何かを実は盗み見ることはないだろうか。秤を持つ手を、少し歪めていることはないだろうか。剣の振り方は、常に一様なのだろうか。

法制度が、実は法律家という人間の振舞いを通して実現される限り、こうした疑問は当然のことと言えます。法律家の仕事は、いわばこの天秤の精度をより高めようとする作業と言えるでしょう。

私の理論や教育内容は、テミスを中心とする法という「信仰体系」に内在する抑圧的側面を浮かび上がらせ、代わりに抑圧されたもの、テミスの落し物に、光を当てこの双眸で見極めていこうとする作業にほかなりません。そうした複眼的で柔軟な思考を持った法律家を目指してほしいと思います。

私は法学部生

“寄り道”から多くを得た4年間

足立一駿
（2026年3月　法学部卒業）

僭越ながら本稿を執筆させていただきます。（貴重な機会をくださりありがとうございます…）

さて、課外活動に邁進したわけでもなく、学業に特段精を出したわけでもない、いわば“だらしない（笑）”大学生活を過ごしてきた私ですが、在学中唯一力を入れたことがあります。それは、授業を「つまみ食い」することです。自身の興味・関心の赴くまま、学部・分野を問わず授業を履修しました。１年次の導入演習をきっかけに選んだ家族法ゼミを中心に、先端科学技術と法コース、さらに副専攻制度を利用して政治経済学部の科目まで、自分が取りたいと感じたら積極的に受けていました。元々、法律だけでなく色々なことが学びたいと考えて早稲法への入学を決めたので、こういったコースが多数用意されていることは、私にとって願ってもないことでした。そしてこの経験を通して、主専攻である家族法の学びもより一層深まりました。橋本先生のゼミでは、単に条文の解釈や判例の検討を行うだけでなく、実社会における家族が関連する問題について、政策・民間の取り組み・司法など幅広い視点から考えるスタイルだったので、上述の私の学びを活かすことができ、大変充実した時間を過ごすことができました。

そんな私ですが、縁あって４月から国家公務員として働くこととなりました。選考面接においては、4年間で培った好奇心と視野の広さを評価していただけたように感じています。高校在学時からの憧れであった職業に就くことができたのは、多様な学びの選択肢が用意されている早稲法の環境があればこそだと思っています。魅力的な授業をしてくださった先生方、そして、意見交換を通じて私の視野を広げるきっかけとなってくれたゼミ生のみんなには、何度お礼を言っても足りないくらいです。ありがとうございます。

サークルも頑張ってました

最後に、新入生の皆さんの中には、将来のことを考えて、タイパよく自分にメリットがあると思う授業・活動にのみ力を入れようとする方も多いと思います。もちろんそれも大切なことですが、私のように、今の自分の好奇心を満たすことが、就活はもちろん人生においてのメリットにつながることもあります。先を見据えて行動したいと考える方こそ、時には目先の欲求に正直になってみるのもいいのではないでしょうか。それでは、この拙い文章が、少しでも皆様の大学生活を彩る一助になれば幸いです。

出会い

増村佳希
（2026年３月　法学部卒業）

たくさんの目標が生まれ、そしてたくさんの夢が叶った4年間でした。その背景にある、学びに満ちた仲間との時間は、今の私をつくる礎となっています。

新入生の皆さまの中には、法学部での学びに不安を感じている方がいるかもしれません。斯く言う私も４年前、周りについていけるのか不安で、当時の目標は４年間で単位を取り切ること、ただそれだけでした。そんな思いで迎えた入学式。そこで出会った仲間たちは、勉強に加えてそれぞれ別の軸を持ち、その両立を当たり前としていました。

翌日、自身の「別軸」を探すため、両親の影響で親しみのあった体育会男子ラクロス部へ見学に向かいました。そこで知った彼らの日本一という目標、そして仲間と夢へ進む姿に強く惹きつけられました。

ここから、私の中での「両立」が始まりました。

毎朝４時に起きて練習に行き、そのまま大学へ通う日々は、想像以上に大変でした。しかしその積み重ねは、私を強く逞しくしてくれました。それは次第に新たな当たり前となり、その時初めて、私の中での当たり前の基準が一つ上がったような気がしました。

また、この生活を４年間続ける中で、勉強と部活動は決して「別軸」ではないことに気づきました。どちらかを選ぶのではなく両方に全力で向き合うからこそ、２つは少しずつ繋がり、やがて１本の軸として重なり合っていく。この考え方は、これまでに出会ってきた仲間たちの中でも、自然と共通していたもののように感じます。

早稲田大学には、夢に向かって全力な仲間と出会える環境があります。たとえ進む道が違っていても、あのタイミングで、あの場所で出会い、同じ時間を過ごせたこと。そのすべての縁に確かな意味があったと思っています。

「出逢えてよかったと、伝えあえる人生を歩みたい」

私が中学時代からずっと大切にしている言葉です。

この４年間の出会いは、これからも私の心に残り続け、人生を形作るかけがえのない宝物となりました。

全日本大学選手権にて優勝し、日本一の目標を達成した

２列目右から４番目が筆者

切抜きの1枚

専任講師　**小倉健裕**　2026年4月嘱任

掲載されている写真は2025年３月12日に撮影したものを切り抜いたもので、場所は、わが恩師のおひとり（学部でも会社法の単位を頂いたし、大学院では修士・博士後期課程を通じて指導を受けた）、尾崎安央（おさきやすひろ）先生（法学学術院名誉教授）の退職記念パーティの会場（リーガロイヤルホテル２階の１室）であった。オリジナルの写真では、わたしの隣に妻も写っている（夫婦の写真を半分にするなんて…というご心配はまったく無用である）。

かっこ書きが多くて、読みにくい文章を書いてしまった。「知らんがな」という声が聞こえた気がする。「善意の第三者に対抗できない」とか、「人的抗弁の切断」とはこういうことだろうか（法学部ジョーク）。写真１枚にも背景があるように、この文章にも背景がある（提出の締切りを失念していたら催促のメールが来たので急いで書いているとか）。その書き手であるわたし自身のことは、どれくらい説明すべきだろうか。

・2026年度の主な担当科目：導入演習、会社法、支払決済法
・研究領域：商法、会社法、金融商品取引法。フランス法を中心にヨーロッパの企業法に関心をもっている。
・公表物：『フランス会社法における新株発行規制―株主総会によるコントロール―』（早稲田大学出版部、2025年）ほか（https://researchmap.jp/7000017551）
・その他のこと：お会いした時にお話ししましょう。

ワセダと私のかかわり

教 授　**金子敬明**　2026年4月着任

金子敬明と申します。民法の授業を担当します。このたびご縁があり、素晴らしい教育・研究環境を誇る早稲田大学に着任することとなり、とても嬉しく思っています。学部のときからずっと国立大学に所属してきましたので、私立大学に勤務するのはこれが初めてです。個人的には、これまでほとんど接することがなかった愛校心なるもののありようを観察する機会を得ることを、非常に楽しみにしています。

そういうわけで、早稲田（大学）とはこれまで、研究会などで何度か訪れたことがある以上のかかわりがなかったのですが、寄稿にあたり改めて記憶をたどってみますと、早稲田には（どちらかといえば高田馬場ですが）早稲田松竹というすばらしい映画館があって、学生の時分にときどきお世話になったことを思い出しました。学生のみなさんは映画といえば配信で見るものだと思っているかもしれませんが、昔はそんなものはなく、東京には個性的な小屋（映画館を大昔はそう呼んでいました）がたくさんありました。２本立て（この言葉にも解説が必要かもしれません）の映画館は、最近では広い東京を見渡してもほとんどなくなってしまいました。そのようななか、早稲田松竹は攻めたプログラミング（コンピュータとは関係ありません）を元気に続けていて、頭が下がります。着任を機に、また少し顔を出そうかと思っています（しかし頻繁に学生さんに見つけられてしまうと足が遠のきそうなので、顔写真は載せないでおきます）。みなさんも、勉強に疲れたら（そうでなくても）、ぜひ行ってみてください。

「Rebecca 伝説の早稲田ライブ」について書く余白がなくなってしまいました（各自で検索！）。まじめなことを一言も書きませんでしたが、それは他の先生の欄を見てください。授業はふつうにまじめにやります。では教場でお目にかかりましょう。

ボルドー／京都から早稲田へ

准教授　**坂本尚志**　2026年4月着任

2026年４月に着任しました坂本尚志です。私は京都大学を卒業後、フランスのボルドー第三大学（現ボルドー・モンテーニュ大学）に留学しました。当初１年半の予定だった留学は結局10年以上に及び、その間大学の教員として８年間日本語を教えたり、ボルドーの有名シャトーから奨学金をいただくなど、多くの経験をしてきました。

2011年にボルドー大学にて博士号を取得した後、京都大学高等教育研究開発推進センター、京都薬科大学に勤務しました。私の専門は20世紀フランス思想史です。特にミシェル・フーコーの思想における哲学と歴史の関係を中心に研究を進めてきました。

日本に帰国後はフランスの哲学教育に関する研究も始めました。フランスの高校生が学ぶ哲学は日本の私たちにとっても興味深いものですが、哲学教育を理想化することなく実践や方法のレベルで理解することを目指しています。

2021－22年にはコロナ禍の最中にもかかわらず在外研究でウィーンに家族で滞在し、パンデミックとロシアのウクライナ侵攻で騒然とする社会を体感してきました。出不精な性格だと自分では思うのですが、なぜかせわしなく動き回っております。

担当科目はフランス語や倫理学、社会学等です。これまで日仏で外国語学部、教育学部、文学部、薬学部の学生に教えてきましたが、法学部で教えるのは初めての経験です。私自身の常識や習慣を解きほぐす貴重な機会になると期待しております。最初は不慣れなことも多いかと思いますが、教育を通じて学生の皆さんが他者や世界について考えるきっかけを提供できればこれに勝る喜びはありません。よろしくお願いします。

17年前の「贈り物」

准教授　**白木敦士**　2026年4月嘱任

愛知県名古屋市に生まれ、本学法学部、同法務研究科（ロースクール）を経て2012年に弁護士となりました。３年間の米国留学の後、2023年から琉球大学大学院法務研究科に勤務し、この春より母校早大に奉職しました。

2006年に法学部に入学した私は、「導入演習科目（演習）５」を受講しました。担当教員は、出来立ての法務研究科に客員教授として赴任した、弁護士の上柳敏郎先生。山﨑豊子『沈まぬ太陽〈３〉・御巣鷹山篇』を読み、御巣鷹山に登り、畑谷史代『差別とハンセン病』を読み、ハンセン病療養所を訪ねる、一風変わった「導入演習」でした。法実務家には、法の解釈技術（①）のほか、②限定された文書や言動から、経験則を用いて、その背景事実を認定する能力（②）、②で認定した事実に①で解釈した法を適用する能力（③）が求められます。上柳先生の「導入演習」を通じて、現場に足を運び、当事者の声に接することでこそ、②に不可欠な想像力が涵養され、その結果として、より適正な法適用（③）を行える関係にあることを、肌で学びました。上柳先生は、優しい笑顔と温和な性格で、学生の話もメモをとりながら、熱心に聞いてくれます。その姿勢は、居酒屋の店員さん、大学の警備員さんにも変わることはありません。自分に自信が持てない一方で、プライドだけは高かった19歳の私にとって、その姿は眩しすぎました。「皆さん自身はそう思わないかもしれないが、早稲田大学で教育を受けられている皆さんは、社会のエリートたるべき存在。そんな皆さんが、そのような機会を得られなかった方のために、どのように生きるかはとても大切」との言葉が忘れられません。

2009年の春、任期により早大を退任することになった上柳先生は、「導入演習」の記録冊子を作ろうと当時学部３年生の私を誘います。上柳先生との作業機会を喜びつつ、合計500頁の「大著」の編集を前に、「記録冊子を作ったところで、誰が見るのか…」と。上柳先生は、2022年に65歳の若さで急逝され、その理由を尋ねる機会はもうありません。あれから17年経ち、私は今、新任教員として、シラバスの作成期限に追わるなか、この「記録冊子」を必死に読み込んでいます。誰かの「上柳先生」になれることを目指して。

ジャズ好きが高じて

准教授　**萩埜　亮**　2026年4月着任

2026年４月に着任しました萩埜と申します。専門はアメリカ文学で、主に小説や詩、ときどき哲学や社会思想などを論じてきましたが、映画や音楽など含め文化全般に関心があります。

私は2004年に早稲田大学の第一文学部（現在の文学部）に入学しました。在学中はジャズ・サークルでの活動にのめり込み、「留学すれば本場のジャズが聴き放題だろう」という実に不純な動機から早稲田の大学院に進級した後、アメリカのニューヨーク州の田舎で５年半ほど博士課程を過ごしました。愛用のテナー・サックスも携えて意気揚々と海を渡ったのですが、日本に帰国するまでには楽器はすっかり錆び付き（私は典型的な「下手の横好き」なのです）、今では立派な「聴き専」となりました。

ジャズは「アメリカが生んだ唯一の芸術」と呼ばれることがあります。そのくらい、アメリカは歴史が浅く、そして移民たちが外から持ち込んだ文化に溢れている国だからです。研究をしていて思うアメリカの魅力は、この「どこまでも未完成」で「ごちゃまぜ」な新しさと活力にあるように思われます。

第二次大戦後は「パクス・アメリカーナの時代」と呼ばれ、日本はアメリカの価値観を必死に学んできました。しかし21世紀の四分の一が過ぎた今、アメリカの覇権国家としての立場は変容し、AI翻訳の飛躍的な進化によって「語学としての英語」の在り方も根本から問い直されています。英語教育やアメリカ研究は、今まさに大きな転換点を迎えているのではないでしょうか。こうした激動の時代において、真に必要な学問とは何なのか。過去の慣習に囚われることなく、自由なアメリカ的精神でもって、法学部の学生の皆さんと共に探究していければと願っております。

「もっと知りたい」からスタート

准教授　**ハンブルトン・アレクサンドラ**　2026年4月着任

2026年４月に着任いたしました、ハンブルトン・アレクサンドラです。専門はカルチュラル・スタディーズで、特に現代日本社会におけるメディアとジェンダーに関心を持っています。

オーストラリア・メルボルン出身で、高校２年生の夏に留学生として初めて日本を訪れたことが、現在のキャリアのきっかけとなりました。知らないことばかりで、理解できないことにあふれる日々を過ごす中で、「もっと知りたい」という好奇心が芽生えました。モナシュ大学で日本語・日本研究を学んだ後、東京大学大学院学際情報学環・学際情報学府に進学し、文化・人間情報学を専攻しました。人生の半分以上を日本で過ごしている現在でも、その好奇心は薄れていません。これまでの研究活動では、さまざまな差別、社会的特権、セクシュアリティ、ポルノ、文化と権力といったテーマを扱ってきましたが、日々新たな発見があります。

学生のみなさんにも、同じように「もっと知りたい」という気持ちを原動力に、新しい発見の続く大学生活を送っていただきたいと考えています。大学では多様な教員や授業と出会い、入学時には想像もしなかった分野や文化、あるいは業界に興味を持つようになるかもしれません。卒業後には、かつて思い描いていた未来とはまったく異なる道を歩むことになる可能性もあります。４年間の大学生活を通じて多くの経験を積み、視野を広げることはとても大切であり、またとても幸せなことだと信じています。

このたび、早稲田大学法学部で教育・研究を行う機会をいただきました。新しい環境で、みなさんと共に考え、そしてみなさんからたくさん学べることを楽しみにしています。

ゆきてかえりしこの15年

教授　**宮坂　渉**　2026年4月着任

この４月に着任いたしました。ローマ法を担当します。1996年に法学部に入学し、原田俊彦先生の下でローマ法を学ぶべく法学研究科に進学、2006年から３年間は助手を務めました。2011年、東日本大震災の直後に筑波大学に着任、民法から基礎法まで幅広く担当しました。2022年からは本学法務研究科で西洋法制史（非常勤）も担当しています。

なかでも筑波大学での15年間は私にとって未知の世界への冒険でした。つくばエクスプレスで秋葉原から45分とはいえ自然豊かな地方都市のつくば市、私立とはいろいろな意味で異なる国立大学、社会科学全般を（法学だけでなく社会学、政治学、経済学も）学べる社会学類、留学生相手に英語での授業（学生時代に受けた経験ゼロ）、学生とゼロから取り組んだ大学対抗交渉コンペティション…　今思い返せば何もかもが楽しく、有意義な経験でした。

そんな「旅」から帰ってきた早稲田は、キャンパスの景色が様変わりしており、馴染みだったお店も少なくなりました。ですが、早稲田を目指して入学された学生さんたちの熱意は（教室よりは喫茶店や居酒屋で発揮された当時とは向かう先がやや違うかもしれませんが）変わらないと感じます。そうした皆さんと一緒に勉強するのを心待ちにしています。

ローマ法は、日本が継受した近代西洋法の基礎であり、1000年近い時間をかけて育まれた古代ローマの精華です。そして、30年近く前、法学部での学びに躓いていた私に法学の面白さを気付かせてくれた学問でもあります。「楽単」（死語？）で終わらせるには勿体無いことをお伝えできればと思います。

「わからない」から始まる

講師（任期付）　**中田己悠**　2026年4月着任

この春に着任しました中田己悠です。初めて南門をくぐった春には、「法学部に入ったのだから、将来は法律に関わる仕事に就くのだろうか」と漠然と考えていました。そこから８年が経ち、さまざまな出会いを重ねるうちに、刑法学の研究と教育に携わることとなりました。その８年間を振り返ると、多くの先生方から数えきれないほどの教えを受けてきましたが、いまもたびたび思い出す言葉があります。

「わからないことはわかったふりをせず、わからないことを整理して、調べて、考えて、明らかにすることです。それができれば、心配になる必要はありません。」これは、私が学部１年生の冬に、のちの指導教員となる先生からいただいた言葉です。

当時の私は、どこがわからないのかそれ自体をまず明らかにし、わからない点をそのままにせずわかるまで調べたり考えたり質問したうえで、わかったつもりで先に進んでいないかを問い直す、そうした循環さえ続けていけば、ひとまず大学で学問に向き合ううえでは十分なのだと受け止めました。そして、あらためて学生時代を思い返すと、結局はこの過程の繰り返しだったように思います。

大学は、多くのわからないことに出会い、それについて考え続けられる場所でもあります。授業を聞いたり、文献を読んだり、議論をしたりするなかで、自分がわかっていないことに向き合うことは、最初は簡単ではないかもしれません。そして、わかったと思っているところにこそ、見落としている問いが潜んでいることもあります。

この春からも、学生の皆さんとともに、わからないことを整理し、考え、確かめていく時間を重ねていければと思っています。どうぞよろしくお願いします。

教員紹介

「2026年度に法学部で授業を担当される法学部・法務研究科の先生方をご紹介します。データは、2026年4月時点のものです。
【凡例】職名、氏名、顔写真、Email/URL（公開されている先生のみ）、法学部での担当科目、研究テーマ、主な研究業績。

教授

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
憲法理論、比較憲法

研究業績
「EU離脱問題後のイギリス憲法学における政治的憲法論」山元一ほか編『憲法の普遍性と歴史性』（日本評論社、2019年）、『立憲主義の復権と憲法理論』（日本評論社、2012年）、『改憲問題』（ちくま新書、2006年）、『近代立憲主義思想の原像』（法律文化社、2003年）など

あいきょう　こうじ
愛敬　浩二

教授

法学部担当科目
民法、土地法

研究テーマ
土地の所有および利用の調整に関する民法の基礎理論、不動産をめぐる民法上の諸問題

研究業績
『不動産法入門』（日本評論社）、『新しい土地法』（編著、日本評論社）、『リーガル･リサーチ＆リポート』『LEGAL QUEST 民法2物権』『民法①総則・判例30』（いずれも共著、有斐閣）、『物権法』（共著、日本評論社）、『債権法改正と判例の行方』（共編著、日本評論社）など

あきやま　やすひろ
秋山　靖浩

教授

法学部担当科目
ジェンダーと法Ⅰ
ことばと法

研究テーマ
法曹倫理、法社会学、ジェンダー法

研究業績
『論究　新時代の弁護士』（共編、弘文堂2024）『手続利用者から見た民事訴訟の実際』（共編、商事法務2023）、『リーガル・カウンセリングの理論と臨床技法』（共著、北大路書房2022）、『民事訴訟の実像と課題』（共編、有斐閣2021）、『新時代の弁護士論理』（共編、有斐閣2020）、『Ethics and Regulations of Legal Service Providers in Japan』（VDM Publishing 2011）

いしだ　きょうこ
石田　京子

准教授

法学部担当科目
西語、教養演習スペイン語圏、持続可能な世界のための人文学、地域文化IE

研究テーマ
アルゼンチン都市民衆運動の文化人類学

研究業績
『同定の政治、転覆する声――アルゼンチンの「失踪者」と日系人』（春風社、2020）、『異貌の同時代』（共編、以文社、2017）、“Interpelación o autonomía. El caso de la identidad nikkei en la comunidad argentino-japonesa”（共著、*Alteridades*、2017）

いしだ　ちえ
石田　智恵

ishidachie@waseda.jp

教授

法学部担当科目
知的財産権法ⅠⅡ

研究テーマ
知的財産法、著作権法

研究業績
『著作権法入門〔第4版〕』（共著、有斐閣、2024年）、『特許法入門〔第2版〕』（共著、有斐閣、2021年）、『〈ケース研究〉著作物の類似性判断―ビジュアルアート編』（共著、勁草書房、2021年）、『デザイン保護法』（共編著、勁草書房、2022年）、『教育現場と研究者のための著作権ガイド』（単編、有斐閣、2021年）、『AIと著作権』（共編、勁草書房、2024年）

うえの　たつひろ
上野　達弘

uenot@waseda.jp

教授

法学部担当科目
民法（金融担保法分野を中心に、民法財産法の諸問題について）

研究テーマ
民法財産法（金融担保法のほか、契約自由の制約に関する理論など）

研究業績
『棚卸資産担保金融の対抗関係の規律』（単著、早稲田大学出版部、2025年）、『動産債権担保法制の国際的位相』（共編著、成文堂、2024年）、“Comparative Secured Transactions Law: How and to What Extent Do Global Standards Affect the Reform of Japanese Inventory Financing Law” 29 Uniform Law Review 189（2024）など

あおき　のりゆき
青木　則幸

aoki@waseda.jp

教授

法学部担当科目
外国法総論／外国法特論／主専攻演習（英米法）

研究テーマ
英米法、生命倫理と法、動物法

研究業績
『人権の重層的保障：アメリカ型連邦制における州憲法の現代的意義』（弘文堂、2022年）、「弁護士と依頼者の通信秘密の保護：カナダ法からの視座」自由と正義73巻12号（2022年）、*Towards a More Inclusive Society:The Future of LGBT Rights in Japan*, 16 St Antony’s International Review 142-155（2021）

あべ　けいすけ
安部　圭介

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
物権総則・債権総則・相続の諸問題

研究業績
『債権譲渡禁止特約の研究』（商事法務）、共著・分担執筆書として、『〈判旨〉から読み解く民法』（有斐閣）、『民法Ⅱ物権（第4版）』（有斐閣）、『債権総論（第2版）』（日本評論社）、『債権法改正の行方』（日本評論社）、『民法理論の深化と革新』（日本評論社）など

いしだ　たけし
石田　剛

教授

法学部担当科目
スペイン語（初・中級）／教養演習スペイン語圏

研究テーマ
キューバ歴史学･思想

研究業績
論文「『犯罪人類学者』イスラエル・カステジャーノスの初期研究―20世紀初頭のキューバにおけるその人種主義―」『ラテンアメリカ研究年報』第42号、「『文化』の理論と実践―キューバの二つの事例から考える」早稲田大学法学会『人文論集』第58号、「現代キューバにおける『人種』と『歴史』―有色人独立党の反乱（1912）を巡って」早稲田大学法学会『人文論集』第55号

いわむら　けんじろう
岩村　健二郎

iwamura@waseda.jp

教授

法学部担当科目
法曹演習、主専攻法学演習

研究テーマ
民事手続法、特に民事執行法

研究業績
著書「民事執行・保全講義」（きんざい）、「執行関係訴訟の理論と実務」（民事法研究会）など

うちだ　よしあつ
内田　義厚

江口　大輔（えぐち　だいすけ）

准教授

法学部担当科目
ドイツ語／文学

研究テーマ
近代ドイツ語圏文学

研究業績
「『ジーベンケース』における名前の交換」、「ジャン・パウエル『自叙伝』における固有名「パウル」」（ともに『固有名の詩学』（前田佳一編）、法政大学出版局、2019）、「想像力の参照先」（『シェリング年報』、2014）など

遠藤　聡太（えんどう　そうた）

教授

法学部担当科目
先端化学技術と法入門

研究テーマ
緊急避難論，不処罰事由論

研究業績
「緊急避難論の再検討」刑雑57・2（2018年）、「自動運転車による生命侵害と緊急避難」刑ジャ58（2018年）、「人工知能（AI）搭載機器の安全性確保義務と社会的便益の考慮」法時91・4（2019年）、「正当業務行為の意義」山口古稀（2023年）、『情報刑法Ⅰ』（2022年・共著）

https://researchmap.jp/endosota/

大澤　慎太郎（おおさわ　しんたろう）

教授

法学部担当科目
民法Ⅰ（総則）／民法Ⅳ（債権各論Ⅰ）／導入演習／2年法学演習／外国書講読（フランス民法入門）／主専攻法学演習（民法）

研究テーマ
担保(保証)制度をめぐる問題全般、民事責任論、交通事故損害賠償法制

研究業績
『民法Ⅲ債権総論（LEGAL QUEST）』（共著、有斐閣、2022年）、「担保の暗号化―フランスにおけるその一断面の観察」『民法学における伝統と変革』（日本評論社、2025年）、「保証の行方―『超高齢社会と担保法』序説―」慶應法学44号（2020年）、「担保保存義務の意義と特約の交錯」『社会の発展と民法学（下巻）』（成文堂、2019年）、「フランス法における保証債務の履行と保証人の保護」早稲田法学91巻3号（2016年）、「フランスにおける保証人の保護に関する法律の生成と展開（1）（2・完）」比較法学42巻2号、同3号（2009年）

大関　龍一（おおぜき　りゅういち）

准教授

法学部担当科目
導入演習／主専攻法学演習（刑事法）

研究テーマ
刑法（特に、因果関係論）

研究業績
「被害者の素因の競合と危険の現実化（1）（2・完）」早稲田法学96巻2～3号、「危険の現実化論の沿革と判断構造（1）～（3・完）」早稲田法学98巻2～4号など

大塚　英明（おおつか　ひであき）

教授

法学部担当科目
会社法／保険法

研究テーマ
第三者のためにする生命保険契約の「対価関係」について

研究業績
『会社法のみちしるべ（第２版）』（有斐閣）、『商法総則・商行為法（第３版）』（有斐閣）、『法の世界へ（第８版）』（有斐閣）、「保険法42条に関する少考」（保険学雑誌、日本保険学会）

w164149@waseda.jp

大橋　麻也（おおはし　あさや）

教授

法学部担当科目
フランス法

研究テーマ
フランスにおける国家の経済関与

研究業績
「フランスにおける行政の非決定行為の裁判対象性」比較法学58巻2号、「フランスにおける一方的行政行為の裁判対象性」日仏法学32号、「フランスの行政判例に見る公役務の識別方法」『早稲田大学法学会百周年記念論文集　第一巻』所収、「独立行政機関とフランス行政法」早稲田法学94巻４号、「フランスの不正競争訴訟における損害について」『知的財産法研究の輪』所収、「『フランス公役務の危機』の構造――国家独占の論理とEU法――」早稲田法学88巻1号、「フランスの不正競争防止法制（1）（2・完）」早稲田法学85巻1号、2号

asaya@waseda.jp

江原　勝行（えはら　かつゆき）

教授

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
人権と制度の関係、政教分離原則、地域統合と憲法

研究業績
「多元主義法理論の共時性と通時性」（2016年）、「イタリアにおける国家の非宗教性原則と公共空間における宗教的標章」（2013年）、「『ＥＵ立憲主義』とイタリア憲法」（2010年）、「フランスにおける国家の非宗教性原則の運用と共和主義」（2008年）

大木　正俊（おおき　まさとし）

教授

法学部担当科目
雇用差別と法、労働市場法

研究テーマ
非正規雇用の法的保護

研究業績
『イタリアにおける均等待遇原則の生成と展開―均等待遇原則と私的自治の相克をめぐって』（日本評論社、2016年）、「外部市場・非正規雇用と労働法制」（日本労働法学会編『講座労働法の再生第6巻 労働法のフロンティア』（日本評論社、2017年）所収）など

大澤　裕（おおさわ　ゆたか）

教授

法学部担当科目
刑事訴訟法／導入演習／主専攻法学演習（刑事法）

研究テーマ
刑事訴訟法（主に捜査法、証拠法、基礎理論）

研究業績
「ロッキード事件最高裁大法廷判決再考―その証拠能力判断」『井上正仁先生古稀祝賀論文集』（有斐閣、2019年）、「刑事訴訟法の基本問題　第1回～第12回」法学教室439～441、443～447、450、452、453、456号（2017～2018年）

大塚　直（おおつか　ただし）

教授

法学部担当科目
民法／環境法

研究テーマ
不法行為法・環境法をめぐる法的政策的問題

研究業績
『環境法』（2020年）、『環境法BASIC』（2023年）、『国内排出枠取引制度と温暖化対策』（2011年）、『環境法研究して1号～15号』（2014年～）『環境リスク管理と予防原則』（共編、2011年）、「生活妨害の差止に関する基礎的考察」法学協会雑誌103巻4号-107巻4号（1986-90年）

大場　浩之（おおば　ひろゆき）

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
不動産公示制度論、物権変動の法的構造、物権債権峻別論批判

研究業績
『不動産公示制度論』（成文堂、2010年）、『物権法講義案（第３版）』（成文堂、2015年）、『時効取得の裁判と登記』（共著、民事法研究会、2015年）、『ドイツ物権法』（共訳、成文堂、2016年）、『物権変動の法的構造』（成文堂、2019年）、『物権法（第３版）』（共著、日本評論社、2022年）、『物権債権峻別論批判』（成文堂、2023年）、『物権法』（成文堂、2023年）

hiro911@waseda.jp

大森　信徳（おおもり　のぶのり）

准教授

法学部担当科目
中国語／教養演習

研究テーマ
中国古典文学、書論

研究業績
『図説文明史7宋 成熟する文明』（創元社、2006年）、「虎丘剣池題字考」（『中国古籍流通学の確立－流通する古籍・流通する文化』雄山閣、2007年）、「白玉蟾『蟄仙庵序』における『蘭亭序』の反映―同時代の王羲之評価をふまえて」（『中国古籍文化研究　稲畑耕一郎教授退休記念論集』東方書店、2018年）、「米芾「平淡」小考―詩書画の批評に通底する文人の眼―」（『早稲田大学法学会百周年記念論文集（第５巻人文編）』成文堂、2022年）

教授

尾形　祥（おがた　しょう）

法学部担当科目
導入演習／主専攻法学演習／外国書講読

研究テーマ
株式会社における会社支配と企業統治、財団法人ガバナンス

研究業績
「スウェーデンにおける家族保有の下での会社支配」『企業法の現代的課題』（成文堂）、「評議員による役員の責任追求の訴えをめぐる法的課題―学校法人と公益財団法人を中心に―」『早稲田大学法学会百周年記念論文集第二巻民事法編』（成文堂）、「一般財団法人の評議員会をめぐる法的課題」早稲田法学100巻3号

教授

岡田　正則（おかだ　まさのり）

法学部担当科目
行政救済法／主専攻法学演習（行政法）

研究テーマ
行政救済法の歴史分析

研究業績
『国の不法行為責任と公権力の概念史』（弘文堂、2013年）、『学問と政治』（共著、岩波新書、2022年）、『行政法Ⅰ 行政法総論』（日本評論社、2022年）、『行政法Ⅱ 行政救済法』（日本評論社、2024年）、「事例で学ぶ行政法ゼミナール」（法学教室2023年4月号より2年間連載）

m-okada@waseda.jp

教授

小川　佳樹（おがわ　よしき）

法学部担当科目
刑事訴訟法

研究テーマ
捜査法、刑事証拠法

研究業績
「供述証拠の収集と合意制度、刑事免責制度」刑法雑誌63巻3号（2025年）、「非行なしとされた事実と身柄拘束の関連性」川出敏裕編『少年法判例百選（第2版）』（2024年）など

教授

乙黒　亮（おとぐろ　りょう）

法学部担当科目
英語／言語学／教養演習

研究テーマ
認知科学、形態論、統語論、言語類型論

研究業績
『形態論の諸相』（共著、くろしお出版、2024年）、「日本語動詞屈折形態における語形予測可能性の計量化」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第五巻 人文編』（成文堂、2022年）、「On Japanese Prenominal Modifiers」『言語研究の楽しさと楽しみ』（開拓社、2021年）、「LFGにおける情報構造」信学技報 TL2018-39、Vol.118、No.271、pp. 1-5（2018年）

otoguro@waseda.jp　www.otoguro.net <http://www.otoguro.net/>

教授

金澤　孝（かなざわ　たかし）

法学部担当科目
憲法

研究テーマ
憲法理論（憲法解釈論、民主政論、司法審査論）、表現の自由

研究業績
共編著『憲法裁判の現場から考える』（成文堂、2011年）、「『反多数決主義という難問』の存在意義に関する若干の考察」（憲法理論叢書25、2017年）、「書評：ジャック・バルキン著『憲法期循環論』（The Cycles of Constitutional Time）」（比較法学56巻1号、2022年）

kanazawa@waseda.jp

教授

河野　真理子（かわの　まりこ）

法学部担当科目
国際関係法
国際法特論
International Law

研究テーマ
国家責任、紛争の平和的解決、投資の保護･促進、国際海洋法

研究業績
E. Mcwhinney & M. Kawano, Judge Shigeru oda the Path to Judicial Wisdom (Nijhoff / Brill, 2005)

mkawano@waseda.jp

教授

岡田　外司博（おかだ　としひろ）

法学部担当科目
主専攻法学演習／独占禁止法Ⅱ／独占禁止法特論

研究テーマ
中小受託取引適正化法・フリーランス法

研究業績
『新現代経済法入門〔第2版〕』（共著）（法律文化社、2010）、「優越的地位の濫用規制の最近の展開」日本経済法学会年報35号（2014）、「下請法をめぐる検討」日本経済法学会年報27号（2006）

准教授

岡山　具隆（おかやま　ともたか）

法学部担当科目
ドイツ語／教養演習

研究テーマ
第二次世界大戦後のドイツ文学

研究業績
「文学とは、邪魔をし、混乱させるものである―ギュンター・グラスの小説『蟹の横歩きで』について―」（『ドイツ文学』、2007）、「ギュンター・グラスの自伝的小説『玉ねぎの皮をむきながら』試論」（『学苑』、2009）

専任講師

小倉　健裕（おぐら　けんゆう）

法学部担当科目
導入演習、会社法、支払決済法

研究テーマ
商法、会社法、金融商品取引法。フランス法を中心にヨーロッパの企業法に関心をもっている

研究業績
『フランス会社法における新株発行規制―株主総会によるコントロール―』（早稲田大学出版部、2025年）ほか（https://researchmap.jp/7000017551）

教授

郭　舜（かく　しゅん）

法学部担当科目
法哲学／グローバル法哲学／主専攻法学演習（法哲学）／外国書講読（英米法哲学）

研究テーマ
法哲学

研究業績
『国際法哲学の復権』（弘文堂、2022年）、『法哲学という企て』（共編、信山社、2025年）、「国際社会に法は存在するか？」（瀧川裕英編『問いかける法哲学』法律文化社、2016年）、「法多元主義の問題提起をどう捉えるか」（法哲学年報2018）、「法哲学から戦争を論ずる」（法教509号、2023年）

skaku@waseda.jp

教授

金子　敬明（かねこ　よしあき）

法学部担当科目
民法

研究テーマ
占有、相続、信託、家族法

研究業績
『新注釈民法（5）物権（2）§§180～294』（共著）、「子の養育に関与する第三者の位置づけ」法の支配217号、「宗教団体と民事法」法律時報1201～1203号など

教授

菊池　馨実（きくち　よしみ）

法学部担当科目
社会保障法

研究テーマ
年金、医療、福祉･介護、生活困窮者支援・生活保護

研究業績
『社会保障再考―〈地域〉で支える』（岩波新書、2019年）、『社会保障法（第３版）』（有斐閣、2022年）、『相続支援の法的構造』（信山社、2022年。編著）ほか多数

教授

法学部担当科目
刑法Ⅱ／応用刑法Ⅰ／主専攻法学演習（刑事法）／導入演習

研究テーマ
刑事過失、海上犯罪

研究業績
「欠陥製品回収義務と刑事責任」神山古稀（成文堂）、「海上交通犯罪と過失犯」現刑38号、「密輸と組織犯罪」海上保安体制（三省堂）、「医療事故と刑事責任」シリーズ生命倫理学18巻（丸善出版）、「最近の過失裁判例に寄せて」曹時65巻6、7号、入門刑事法第9版（共編著、有斐閣）など

北川　佳世子（きたがわ　かよこ）

教授

法学部担当科目
ドイツ語

研究テーマ
フェーロー語

研究業績
“Zur färöischen Übersetzung von Løgstrups Den etiske fordring”, 人文論集64（2026年2月）

グュルベルク　ニールス

guelberg@waseda.jp

教授

法学部担当科目
会社法Ⅱ／主専攻法学演習（商法）

研究テーマ
会社法・金融法・信託法・電子商取引法

研究業績
『数字でわかる会社法〔第２版〕』（共著、2021年）、「わが国における銀行・銀行グループの業務範囲規制について」金融庁金融研究センターディスカッションペーパー（2020年）、「商事信託における受託者機能の分担―いわゆる職務分掌型の「共同受託者」を中心に」『信託法制の新時代―信託の現代的展開と将来展望』（2017年）所収、「分散台帳技術と法制度」ジュリスト1529号（2019年）など

小出　篤（こいで　あつし）

koide@waseda.jp

教授

法学部担当科目
刑事政策

研究テーマ
少年法の理論体系の構築

研究業績
「『虞犯少年』概念の構造（1）～（6･完）」早稲田法学79巻3号～82巻1号（2004年～2006年）、「『虞犯少年』に対応するシステムに関する考察」早稲田法学83巻2号（2008年）、「『非行少年』と責任能力（1）～（3･完）」早稲田法学85巻2号～86巻4号（2010～2011年）、「少年に対する不定期刑についての刑事政策論的考察（1）・（2･完）」早稲田法学90巻3号･4号（2015年）など

小西　暁和（こにし　ときかず）

toki@waseda.jp

教授

法学部担当科目
導入演習／国際経済法Ⅰ／国際経済法Ⅱ／主専攻法学演習（国際経済法）

研究テーマ
経済安全保障と国際法、国際紛争の平和的処理、サイバー活動と国際法

研究業績
『国際法』（単著、放送大学教育振興会、2025年）、『ビジュアルテキスト国際法〔第4版〕』（共著、有斐閣、2025年）、『防衛実務国際法』（共著、弘文堂、2021年）、『国際法』（共著、有斐閣、2011年）

酒井　啓亘（さかい　ひろのぶ）

准教授

法学部担当科目
フランス語、倫理学、社会学、教養演習（フランス語圏）

研究テーマ
20世紀フランス思想史、哲学教育

研究業績
フーコー『主体性と真理』（共訳、筑摩書房、2025年）、『バカロレアの哲学』（2022年、日本実業出版社）、『フーコー研究』（共著、岩波書店、2021年）

坂本　尚志（さかもと　たかし）

教授

法学部担当科目
国際取引法（講義、ゼミ）
導入演習

研究テーマ
国際金融法、電子商取引法
ウィーン売買条約

研究業績
単著『法律学者の貨幣論』（中央経済社、2023年）『国際取引法講義 第3版』（中央経済社、2021年）、『資金決済システムの法的課題』（国際書院、2003年）、共著『International Monetary and Financial Law』（Oxford University Press, 2023年）、『ウィーン売買条約と仲裁の実務と理論』（中央経済社、2025年）

久保田　隆（くぼた　たかし）

t-kubota@waseda.jp

教授

法学部担当科目
応用会社法Ⅰ／資本市場法

研究テーマ
金融商品取引法・会社法

研究業績
著書「証券市場の機能と不公正取引の規制」（有斐閣）、「アメリカ証券取引法」（弘文堂）、「金融商品取引法」（有斐閣）、「会社法」（商事法務）

黒沼　悦郎（くろぬま　えつろう）

教授

法学部担当科目
先端科学技術と法入門／自動運転事故をめぐる被害者救済と法／先端医療介護サービスと法/先端科学技術と法演習１～４／導入演習

研究テーマ
先端科学技術と法、リスクと法、損害賠償と法

研究業績
「MaaS時代における自動運転事故の民事責任と保険―被害者救済の最適なあり方を指向して」野田博他編『商事立法における近時の発展と展望』pp.69-89（中央経済社、2021）、「日本版MaaSの推進とMaaSサイバー保険―自動運転に対するより高い社会的受容性を指向して」保険学雑誌653号pp.89～117（2021）、など

肥塚　肇雄（こえづか　ただお）

教授

三枝　健治（さいぐさ　けんじ）

法学部担当科目
民法

研究テーマ
契約法、家族法等

研究業績
「アメリカ契約法における開示義務」早法72巻2号、同3号（1997年）、『ケースで考える債権法改正』（共著、有斐閣、2022年）、『民法5契約（有斐閣ストゥディア）』（共著、有斐閣、2022年）、*Contract Law in Japan*（共著、Kluwer Law Intl、2019年）

教授

法学部担当科目
導入演習／刑事訴訟法／応用刑事訴訟法／主専攻法学演習

研究テーマ
刑事手続法

研究業績
「刑事訴訟法（第3版）」（単著、有斐閣、2024年）、「条解刑事訴訟法（第5版）」（編集代表、弘文堂、2022年）、「現代の裁判（第8版）」（共著、有斐閣、2022年）、「入門刑事手続法（第9版）」（共著、有斐閣、2023年）

酒巻　匡（さかまき　ただし）

教授

法学部担当科目
英語／地域文化／旧植民地の歴史･文化

研究テーマ
演劇･映像学／オーストラリア文化研究

研究業績
著書「現代演劇と文化の混淆」、著書「オーストラリア映画史ー映し出された社会･文化･文学」、共編著「演劇学のキーワーズ」

澤田　敬司（さわだ　けいじ）

ksawada@waseda.jp　homepage2.nifty.com/wombat

しぶや　けんじろう
渋谷　謙次郎

教授

法学部担当科目
ロシア法

研究テーマ
現代ロシア法全般、ロシア法思想、ロシア文学と法など

研究業績
『法を通してみたロシア国家』（ウェッジ）、『言語権の理論と実践』（共編著、三元者）、「ロシア多民族連邦制と『多文化主義』」（飯田文雄編『多文化主義の政治学』、法政大学出版局、「ワシーリー・グロスマンと『自由』」（『神戸法学雑誌』69巻1号、4号）など

しもやま　けんじ
下山　憲治

教授

法学部担当科目
行政法／行政救済法

研究テーマ
リスク行政と法、科学技術と行政法、国家補償法

研究業績
「危機に対応する手法の在り方」公法研究84号（2023年）、「科学・技術の動態性と法治主義に関する省察」本多滝夫他編『転形期における行政と法の支配の省察』（法律文化社、2021年）、「科学・技術水準への準拠義務と国の責任」和田真一他編『現代市民社会における法の役割』（日本評論社、2020年）、『行政法』（日本評論社、2017年）、『リスク行政の法的構造』（敬文堂、2007年）

しらいし　だい
白石　大

教授

法学部担当科目
民法Ⅴ／主専攻法学演習（民法）／法曹の仕事を知る

研究テーマ
金融担保法、民事実体法の倒産手続における変容

研究業績
「フランスにおける将来債権譲渡と譲渡人の倒産手続との関係」（比較法学43巻2号）、「将来債権譲渡の対抗要件の構造に関する試論」（早稲田法学89巻3号）、「債権担保法制の立法に向けた検討課題」（NBL1198号）など

すえとみ　じゅんこ
末冨　純子

准教授

法学部担当科目
国際紛争解決（国際私法、商事仲裁、国際投資仲裁、国際法とビジネス）／国際通商法（関税、投資法、持続可能なビジネス）／国際法律実務（国際取引、交渉）

研究テーマ
サプライチェーンと法律実務、国際紛争解決

研究業績
『サプライチェーンと法律実務』（勁草書房、2026年2月）、「二国間又は地域的な協定における紛争解決制度のWTO紛争解決制度への補完的機能と紛争解決制度の変革－再生可能エネルギーなどの環境関連案件を題材に－」（フィナンシャル・レビュー、令和元年（2019年）第5号（通巻第140号））、「Q＆A　FTA・EPAハンドブック」（民事法研究会、2013年）、「国際投資仲裁ガイドブック」（共著、中央経済社、2016年）

すぎもと　かずとし
杉本　一敏

教授

法学部担当科目
導入教育科目（演習）／主専攻法学演習

研究テーマ
刑事帰属論

研究業績
「規範論から見たドイツ刑事帰属論の二つの潮流（上）（中）（下）」比較法学37巻2号～38巻2号、「『帰属を阻害する犯罪』の体系と解釈（1)(2)」愛知学院大学論叢法学研究48巻1号、50巻1号など

すずき　りえこ
鈴木　理恵子

教授

法学部担当科目
英語／英文学

研究テーマ
19世紀英文学

研究業績
The Shelleys and the Brownings: Textual Re-Imaginings and the Question of Influence **(Liverpool University Press, 2022),** "'What was all this except the lesson of life?": Browning's Fifine at the Fair and Shelley', *Keats-Shelley Review* 30.1 (2016) 63-69.

rsuzuki@waseda.jp

しもだ　ひらく
下田　啓

教授

法学部担当科目
英語／教養演習

研究テーマ
近現代日本史

研究業績
Lost and Found: Recovering Regional Identity in Imperial Japan **(Harvard UP, 2014); "Tongues-Tied: The Making of a National Language and the Discovery of Dialects in Meiji Japan,"** *The American Historical Review* **(2010)**

しゅどう　さちこ
首藤　佐智子

教授

法学部担当科目
言語学／英語

研究テーマ
語用論、法と言語、社会言語学

研究業績
How to Translate Apology and Non-apology in Legal Contexts: A Linguistic Analysis of Potentially Serious "Subtle Mistranslation" in Japan. International Journal for the Semiotics of Law : 32 .「商標の普通名称化問題における言語学的論点」（社会言語科学7：2）. The Presupposition and Discourse Function of the Japanese Particle Mo (Routledge).

shudo@waseda.jp　　www.f.waseda.jp/shudo/

しらき　あつし
白木　敦士

准教授

法学部担当科目
国際民事訴訟法Ⅰ／主専攻法学演習（国際私法）／法曹の仕事を知る

研究テーマ
国際民事訴訟を通じた法の実現、域外証拠収集、アメリカ家族法

研究業績
共著『Global Clinical Legal Education』（Routledge、2025）、「日米間の域外民事証拠収集法制をめぐる課題と展望 」国際私法年報27号（2025）、「米国における域外民事証拠収集法制の発展」早稲田大学法務研究論叢7号（2023）、「アメリカにおけるエンターテイメント業界で働く子どもの保護法制―ニューヨーク州における取り組みをを例に―」琉大法学84号（2023）、「ニューヨーク州離婚法の概説（1）－（11・完）」戸籍時報 No.823-834（2022-2023）

すがわら　いくお
菅原　郁夫

教授

法学部担当科目
主専攻法学演習（民事訴訟法）

研究テーマ
民事訴訟の心理学的考察、司法統計の歴史的考察

研究業績
民事裁判心理学序説（信山社、1998年）、民事訴訟政策と心理学（慈学社、2010年）、統計から明治期の民事裁判（信山社、2005年）、統計からみた大正・昭和戦前期の民事裁判（慈学社、2011年）

すずき　まさふみ
鈴木　將文

教授

法学部担当科目
知的財産法

研究テーマ
知的財産法、国際知的財産法

研究業績
『商標法コメンタール〔新版〕』（共編著、勁草書房、2022）、Trade Secret Protection: Asia at a Crossroads（共著、Kluwer Law Int'l 2021）、Patent Remedies and Complex Products: Toward a Global Consensus（共著、CUP 2019）、論文「特許権侵害に対する差止請求権の制限に関する一考察」（2023）、論文「越境的要素を有する行為による特許権侵害」（2023）、論文「著作物の利用に関するプラットフォーマーの役割と責任」（2022）など

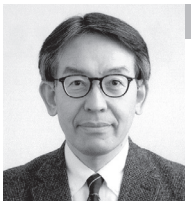
たかおか　ゆうすけ
髙岡　佑介

教授

法学部担当科目
ドイツ語／教養演習

研究テーマ
近代ドイツ思想

研究業績
「生産力の円環―有機体論としてのドイツ栄養生理学」（『近代科学と芸術創造』行路社、2015）、「統計学と社会改革―エルンスト・エンゲルの「人間の価値」論」（『社会思想史研究』35号、2011）「労働科学者としてのエミール・クレペリン―「疲労との闘争」に見るドイツ産業社会の一断面」（『表象』5号、2011）など



教授

法学部担当科目
民事訴訟法Ⅰ／ドイツ語圏を知る／主専攻法学演習（民事訴訟法）

研究テーマ
民事証拠法、訴訟審理原則、家事事件手続法、集団訴訟制度

研究業績
『自由証明の研究』（有斐閣・2008年）、『ロースクール民事訴訟法〔第5版〕』（共著、有斐閣・2019年）、『グローバル化と社会国家原則』（共編著、信山社・2015年）、『家事事件手続法〔第3版〕』（共著、有斐閣・2016年）、「「裁判官の私知」の利用禁止について」（高橋宏志先生古稀祝賀『民事訴訟法の理論』〔有斐閣・2018年〕所収）、「ウェブ会議方式の訴訟審理の規律について」本間靖規先生古稀祝賀『手続保障論と現代民事手続法』〔信山社・2022年〕所収）など

たかだ　まさひろ
髙田　昌宏

教授

法学部担当科目
Introduction to Labor and Employment Law in Japan、雇用関係法

研究テーマ
労働者代表制度、労使関係法上の「労働者」及び「使用者」概念

研究業績
『労働法 第5版』（共著、有斐閣、2025年）、『デジタルプラットフォームと労働法―労働者概念の生成と展開』（共著、東京大学出版会、2022年）、「従業員代表制と労使協定」日本労働法学会編『講座労働法の再生第１巻労働法の基礎理論』（日本評論社、2017年）159頁

たけうち　ひさし
竹内　寿

hisashi_to@waseda.jp

准教授

法学部担当科目
主専攻法学演習／民事訴訟法Ⅰ

研究テーマ
事業再建と倒産法

研究業績
「代替許可における株主の地位」加藤哲夫先生古稀祝賀『民事手続法の発展』（成文堂、2020）所収、「清算価値保障原則と別除権・相殺権の行使」本間靖規先生古稀祝賀『手続保障論と現代民事手続法』（信山社、2022）所収、「否認権との関係での価額償還請求における価額算定のあり方」Law&Practice18号（2025）など

たなはし　ようへい
棚橋　洋平

教授

法学部担当科目
行政法・地方自治法

研究テーマ
政治･行政システムの改革と公法･行政法理論

研究業績
『地方分権改革の法学分析』、『法務に強くなる！レベルアップ地方自治法解説』、『住民投票』（共著）、『行政手続法』（共著）、「経済行政と公務員法制」首藤･岡田編『経済行政法の理論』所収、「自治体ガバナンス改革下における自治体監査制度改革の検討」北村他編『自治体政務法務の理論と課題別実践』所収、「国家的公益と地域的公益の対立と調整」法律時報91巻11号、「地方公共団体の再編」公法研究82号

たむら　たつひさ
田村　達久

教授

法学部担当科目
中国語／教養演習

研究テーマ
中国近世文学、近世通俗文芸

研究業績
「白馬モチーフの変奏―二種の白馬宝巻をめぐって」中国文学研究45期（2019年）、「ハーバード大学イエンチン図書館所蔵の宝巻について」中国古典小説研究22号（2019年）、「裁きと神々の接点―『賢良宝巻』の変容にみる宝巻の変遷―」中国文学研究44期（2018年）、「宝巻の流布と明清女性文化」（共著『中国古籍流通学の確立―流通する古籍・流通する文化―』雄山閣、2007年）、単編著『影印･翻字･注釈　搶生死牌宝巻』（中国古籍研究所、2005年）など

つじ　りん
辻　リン

教授

法学部担当科目
民事訴訟法／国際民事訴訟法

研究テーマ
民事訴訟法の諸原則、民事証拠収集法制の改正問題

研究業績
『読解 民事訴訟法』（有斐閣）、『民事訴訟法理論と「時間」的価値』（成文堂）、『民事訴訟法Visual Materials』（共著、有斐閣）、「確定判決の不当取得とその後の不法行為訴訟」曹時76巻9号、「「参加の利益」論の現在」曹時71巻9号、「我が国の知らない「訴訟担当」の当事者適格に関する覚書」（『加藤哲夫先生古稀祝賀』成文堂）など

てしがはら　かずひこ
勅使川原　和彦

www.facebook.com/WasedaUniv.SchoolOfLaw.TeshiSeminar

教授

法学部担当科目
法社会学

研究テーマ
共有に伴う社会的ジレンマと法

研究業績
『入会林野と所有者不明土地問題』（共編著、岩波書店、2023年）、『コモンズからの都市再生』（単著、ミネルヴァ書房、2012年）、“Bundle of Rights Reversed”, International Journal of the Commons, 2020, DOI: 10.5334/ijc.1080

たかむら　がくと
高村　学人

教授

法学部担当科目
英語／言語学

研究テーマ
言語人類学、詩学、言語とジェンダー

研究業績
Poetics of Living: Aspects of Multimodal and Multisensorial Semiosis（Bloomsbury 2026）;『ポエティクスの新展開―プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて』（ひつじ書房 2022）; “Pluri-Modal Poetic Performance of Banter: The Angama Ritual on Ishigaki Island in Japan” in *Humour in Asian Cultures*（Routledge 2022）

たけくろ　まきこ
武黒　麻紀子

mtakekuro@waseda.jp

教授

法学部担当科目
国際私法、国際取引法、主専攻法学演習（国際私法）、2年法学演習（国際私法）、導入演習

研究テーマ
国際不法行為法、英米国際私法の歴史分析

研究業績
『国際不法行為法の研究』（成文堂、2017年）、「アメリカ抵触法第3次リステイトメント試案における法選択方法論――『2ステップ・プロセス』を中心に」早稲田法学101巻3号（2026年）

たねむら　ゆうすけ
種村　佑介

教授

法学部担当科目
刑法／経済刑法

研究テーマ
財産犯論

研究業績
「財産犯における客体と損害概念」刑法雑誌57巻2号（2018年）、「権利行使と財産犯」『野村稔先生古稀祝賀論文集』（成文堂、2015年）、「詐欺罪における財産的損害」『曽根威彦先生･田口守一先生古稀祝賀論文集［下巻］』（成文堂、2014年）、「財産犯の保護法益」神奈川法学43巻1号（2010年）

たやま　さとみ
田山　聡美

教授

法学部担当科目
中国語／教養演習（中国語圏）

研究テーマ
中国古典文学研究
唐代詩文研究

研究業績
「中唐初期における蘇州文壇の形成についての一考察」松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集、研文出版（2006年）、「杜陵野客と腐儒」生誕千三百年記念杜甫研究論集、研文出版（2013年）、「白居易の青年期における選良意識について」中国文学研究43（2017年）、「徳宗朝・貞元年間における重陽賜宴と韋応物について」人文論集60（2022年）、「韋応物の滁江二洲における治績に関する一考察」中国詩文論叢42・43（2022・23年）

つちや　あきお
土谷　彰男

教授

法学部担当科目
会社法

研究テーマ
会社法

研究業績
2005年会社法と会社の機関（ジュリスト1315号）、鳥山ほか『会社法』新訂版（学陽書房）、コーポレート･ガヴァナンスとフランス会社法（上･下）（月刊監査役459･460号）、フランス会社法とコーポレート･ガヴァナンス論（比較会社法研究／成文堂）など

とりやま　きょういち
鳥山　恭一

toriyama@waseda.jp

講師（任期付）

ないとう　さと
内藤　識

法学部担当科目
導入演習／先端科学技術と公法／先端科学技術と法演習

研究テーマ
教育法、AIと法、憲法

研究業績
Introduction and Analysis from legal perspective of Japan's Latest Draft of AI Guideline（Lov＆Data Nr.157, 2024）、「障害者権利条約の求めるインクルーシブ教育実現に向けたデンマークを参考とした法制度」季刊教育法219号（2023年）、「アメリカ合衆国における障害のある子どもが「無償で適切な公教育」を受ける権利(1)(2)(3)―分離解消と懲戒を中心に―」早大法研論集186号～188号（2023年）

satonaito@fuji.waseda.jp

講師（任期付）

なかた　みゆう
中田　己悠

法学部担当科目
導入演習／外国書講読（ドイツ刑法研究・ドイツ公法入門・北欧諸国の社会と法）

研究テーマ
刑法学（特に、共犯論）

研究業績
「旧刑法における『正犯=実行』枠組みに関する系譜的考察（1）～（3・完）」早稲田大学大学院法研論集187号～189号（2023年～2024年）、「現行刑法における『正犯=実行』枠組みに関する系譜的考察（1）～（2・完）」早稲田法学会誌74巻1＝2号～75巻1号（2024年）など

教授

なかむら　たみお
中村　民雄

法学部担当科目
外国法（英米法）総論／主専攻演習（英米法・EU法）

研究テーマ
イギリス法、EU法、持続可能性法学

研究業績
『イギリス憲法とEC法―国会主権の原則の凋落―』（東京大学出版会、1993年）、中村民雄・須網隆夫編『EU法基本判例集〈第3版〉』（日本評論社、2019年）、中村民雄『EUとは何か（第4版）』（信山社、2025年）、中村民雄編『EU法の参照可能性』（信山社、2025年）

tamio@waseda.jp

准教授

はぎの　りょう
萩埜　亮

法学部担当科目
英語／教養演習

研究テーマ
アメリカ文学・文化

研究業績
「"Commerce! Of all words the most magical": クロード・マッケイ『バンジョー』における商業ネットワークと即興の戦術」（『多民族研究』17号）；"Through the Intimacies of This Dance": Moral Perfectionism in William Carlos Williams's *Kora in Hell* and Other Improvisations（*The Journal of the American Literature Society of Japan*, vol.18）

教授

はしもと　ゆき
橋本　有生

法学部担当科目
導入演習／２年法学演習（民法）

研究テーマ
判断能力が不十分な成年者の法的保護

研究業績
「法定後見をめぐる比較法的研究」『現代家族法講座第4巻後見・扶養』（日本評論社、2020年）、「精神障害者のソーシャルインクルージョン」『持続可能な世界への法：Law and sustainability の推進』（成文堂、2020年）、「成年被後見人の面会交流支援について―近時の裁判例を題材として―」早法97巻1号（2021年）、「イギリスにおける事実婚・同性婚に対する法的対応」税研220号（2021年）など

講師（任期付）

はらだ　かな
原田　香菜

法学部担当科目
先端科学技術と私法／導入演習／先端科学技術と法演習

研究テーマ
生殖補助医療におけるヒト胚・配偶子をめぐる課題、ヒト生体試料等の取扱い

研究業績
「生殖補助医療と親子法　出生する子の出自を知る権利の観点から―生まれてくる子のための医療と法制度のあり方についての一考察―」棚村政行先生古稀記念論文集（2024年）、「ヒト胚の取扱いに関する動向」年報医事法学38号（2023年）、「診療・看護等で得た医療情報およびヒト由来試料等の取扱いに係る論点整理と現場における注意点」（医療事故・紛争対応研究会誌 第14巻（2022年）、「ヒト配偶子に関する権利の性質をめぐる英国判例の分析と本邦への示唆―生殖補助医療における no-property原則の例外の展開―」早稲田大学大学院法研論集178号（2021年）など

准教授

なかざと　ひろし
中里　浩

法学部担当科目
導入演習、独占禁止法、主専攻法学演習（経済法）

研究テーマ
経済法と労働法の交差点、入札談合・カルテル規制とエンフォースメント

研究業績
『新経済刑法入門（第3版）』（2020年、共著）、「著作者人格権不行使特約の適法性―経済法の視点から」国際著作権法研究3号、「下請法改正に向けた検討課題」早稲田法学100巻3号、「労働組合による正当性を逸脱する行為の範囲と独占禁止法との関係―第二次ボイコットの米国判例分析を中心に 」同101巻1号（いずれも2025年）

教授

なかむら　たかゆき
中村　隆之

法学部担当科目
仏語／芸術論

研究テーマ
環大西洋文化研究

研究業績
『ブラック・カルチャー　大西洋を旅する声と音』（岩波新書）『環大西洋政治詩学　20世紀ブラック・カルチャーの水脈』（人文書院）『野蛮の言説　差別と排除の精神史』（春陽堂書店）『エドゥアール・グリッサン〈全-世界〉のヴィジョン』（岩波書店）ルイ・サラ＝モランス『黒人法典　フランス黒人奴隷制の法的虚無』（共訳、明石書店）

准教授

なかもと　かおり
中本　香織

法学部担当科目
導入演習／主専攻法学演習

研究テーマ
判決手続における当事者適格

研究業績
「訴訟担当概念の比較法的考察と民事訴訟法115条1項2号の適用対象に関する一試論」早稲田法学93巻1号（2017）、「わが国における当事者適格概念の生成過程－判決効との関係を中心に－」早稲田法学94巻2号（2019）、「給付訴訟における権利能力なき社団の原告適格と判決効の主観的範囲」加藤哲夫先生古稀祝賀『民事手続法の発展』（成文堂、2020）など

教授

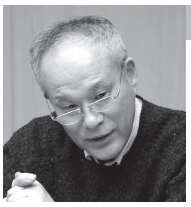
はこい　たかし
箱井　崇史

法学部担当科目
商法（海商法）／商法（総則・商行為法）

研究テーマ
海法、国際商取引法の諸問題

研究業績
『基本講義 現代海商法（第4版）』（2022年）、『海商法（第2版）』（共著、2013年）、『船舶衝突法』（編著、2012年）、「1681年フランス海事王令試訳（1 ～ 3）」（早稲田法学81巻4号、82巻1号、2号）

htaka@waseda.jp



教授

はせべ　やすお
長谷部　恭男

法学部担当科目
導入講義（法学入門）、応用憲法

研究テーマ
立憲主義の基礎、放送・通信法制

研究業績
『憲法の円環』（岩波書店）、『憲法の境界』（羽鳥書店）、『憲法の論理』（有斐閣）

教授

ばんざい　ひろゆき
萬歳　寛之

法学部担当科目
国際法Ⅰ／Ⅱ、主専攻法学演習（国際法）

研究テーマ
国家の国際違法行為責任、東アジアにおける国際法秩序

研究業績
『国際違法行為責任の研究』（単著、2015年）、『日台経済交流と国際法』（単著、2022年）、『海洋法』（編著、2024年）、『概説国際法』（共編著、2024年）

ハンブルトン アレクサンドラ

准教授

法学部担当科目
英語／映像論／教育演習（表象文化）

研究テーマ
カルチュラル・スタディーズ、現代日本社会

研究業績
2024 “The Beginning of Despair: Aggressive Retsuko and the Sanrioization of Women’s ‘Transgressive Rage’”. *Japan Forum* 36 (4): 385-411, co-authored with Wes C. Robertson and Mie Hiramoto. 2021 “One Dream Man Versus Twenty-Five Women with Dreams: Gender and Ambition in the Bachelor Japan”. *Japanese Studies* 41 (1): 23-39. 2016 “When Women Watch: The Subversive Potential of Female-Friendly Pornography in Japan”. *Porn Studies* 3 (4): 427-442.

人見（ひとみ） 剛（たけし）

教授

法学部担当科目
主専攻法学演習（行政法）

研究テーマ
行政法、地方自治法

研究業績
『近代法治国家の行政法学』（成文堂）、『分権改革と自治体法理』（敬文堂）、『リーガルクエスト·行政法（第5版）』（共著、有斐閣）、『行政法事例演習問題教材（第2版）』（共著、有斐閣）、『ホーンブック·地方自治法（第3版）』（共編著、北樹出版）、『世界の公私協働』（共編著、日本評論社）、『公害防止条例の研究』（共編著、敬文堂）、『新基本法コンメンタール地方自治法』（共編著、日本評論社）、『協働型の制度づくりと政策形成』（共編著、ぎょうせい）

福島（ふくしま） 洋尚（ひろなお）

教授

法学部担当科目
応用会社法Ⅰ／
応用会社法Ⅱ／
主専攻法学演習（商法）

研究テーマ
商法、会社法

研究業績
『キーワードで読む会社法』（共著、有斐閣）、『Law Practice 商法』（共著、商事法務）、『ストゥディア会社法』（共著、有斐閣）、『商法演習Ⅰ―会社法』（共編、成文堂）

文（ぶん） 元春（げんしゅん）

教授

法学部担当科目
導入演習／外国法総論（中国法）／主専攻法学演習（現代中国法）

研究テーマ
中国法、民事責任論

研究業績
『持続可能な農地利用のための農地法制の比較研究』（共編、成文堂、2023年）、『中国不法行為法の研究』（編著、成文堂、2019年）、『入門中国法（第2版）』（共著、弘文堂、2019年）など

松澤（まつざわ） 伸（しん）

教授

法学部担当科目
刑法総論／刑法各論／法学演習／外国書講読

研究テーマ
刑法

研究業績
著書『機能主義刑法学の理論』（信山社）
編著『Methodology of Criminal Law Theory』（Nomos/Hart）
編著『Europe and Japan Cooperation in the Fight against Cross-border Crime』（Routledge）
著書『Essays on Criminal Law in Japan』（成文堂）

松村（まつむら） 和徳（かずのり）

教授

法学部担当科目
応用民事訴訟法Ⅰ、民事執行·保全法／主専攻法学演習（民事訴訟法）

研究テーマ
民事訴訟における判決効論、審理過程論、当事者論、民事執行における救済制度論

研究業績
単著『民事執行救済制度論』（成文堂・1998）、同『手続集中論』（成文堂・2019）、同『民事訴訟理論再考』（成文堂・2025）、同『倒産法概論』（法学書院・2014）、同『民事執行·保全法概論（第2班）』（成文堂・2013）：編著『スイス民事訴訟法概論』（成文堂・2022）同『民事訴訟法演習教材』（成文堂・2012）、同『オーストリア倒産法』（岡山大学出版会・2010）、同『民事模擬裁判ティーチング・マニュアル（初級編）』（慈学社・2008）

稗田（ひえだ） 雅洋（まさひろ）

教授

法学部担当科目
法曹演習／主専攻法学演習（刑事法）

研究テーマ
刑事訴訟法、刑法、医療観察法

研究業績
著書「条解刑事訴訟法（第5版増補版）」（編集委員、弘文堂、2022年）、「陪審・参審制度（ドイツ編）」（共著、司法協会、2000年）、「裁判員裁判と刑法理論ー裁判官の視点から」刑法雑誌55巻2号（2016年）

m-hieda@waseda.jp

平井（ひらい） 光貴（みつき）

講師（任期付）

法学部担当科目
導入演習／先端科学技術と法倫理／先端科学技術と法演習

研究テーマ
法哲学

研究業績
「法とは何か」とは何か：メタ法概念論と概念工学（立教法学（104）、2021年）、法理論に関する当為および「法理論の道徳的正当化要求テーゼ」は可能か（立教法学（101）、2020年）、Legal Positivism and the Point of Theoretical Value-Neutrality（Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie Beiheft 161、2020年）

古谷（ふるや） 修一（しゅういち）

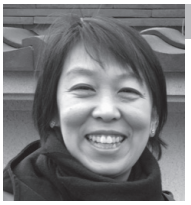
教授

法学部担当科目
主専攻法学演習（国際法）

研究テーマ
国際刑事裁判

研究業績
「国際刑事裁判権の意義と問題ー国際法秩序における革新性と連続性」、村瀬信也·洪恵子編『国際刑事裁判所』（2014年）所収：「稼動を始めた国際刑事裁判所の課題ー外からの抵抗と内なる挑戦」『法律時報』79巻4号（2007年）

sfuruya@waseda.jp



星井（ほしい） 牧子（まきこ）

教授

法学部担当科目
独語／教養演習／言語学

研究テーマ
外国語教育学、応用言語学、第二言語習得、ドイツ語教育研究

研究業績
講座ドイツ言語学 第3巻『ドイツ語の社会語用論』（分担執筆、2014年）、**Von den Kommunikationsstrategien zum prduktions- und verständnissichernden Handeln.** *Deutsch als Feemdsprache*, **4/2017, 195-201.**（共著、2017年）、Interaktionale Kompetenz als Lernziel für Lernende und Lehrende des Deutschen als Fremdsprache. *Zeitschrift für Interaktionsforschung in DaFZ*,1(1),13-34（共著、2021年）

mhoshii@waseda.jp

松原（まつばら） 芳博（よしひろ）

教授

法学部担当科目
刑法総論／応用刑法Ⅱ
導入演習／法学演習

研究テーマ
刑法解釈学、
刑法における行為と結果

研究業績
著書『刑法総論〔第4版〕』（2025年、日本評論社）、『刑法各論〔第3版〕』（2024年、日本評論社）、『犯罪概念と可罰性』（1997年、成文堂）、『刑法概説〔第3版〕』（2024年、成文堂）、『刑法の判例・総論』『同・各論』（2011年、成文堂）、『続・刑法の判例　総論』『同・各論』（2022年、成文堂）、『行為主義と刑法理論』（2020年、成文堂）

matubara@waseda.jp

マニゴ　ヴァンサン

准教授

法学部担当科目
仏語／教養演習

研究テーマ
日本近現代美術、前衛芸術

研究業績
著書：『戦後フランスの前衛たち――言葉とイメージの実験史』（共著、水声社、2023年）、『Mythologies du superhéros : histoire, physiologie, géographie, intermédialités（共著、PUL、2014年）、論文：『Surréalisme et bande dessinée : un rendez-vous manqué?』（『人文論集』59号、2021年）、「日本のシュルレアリスム―固有かつ総合的な芸術運動の試み―」（『ART TRACE PRESS』4号、2016年）

教授

法学部担当科目
導入講義（法学入門）／労使関係法／労働市場法／主専攻法学演習（労働法）

研究テーマ
労働法

研究業績
『労働法〔第11版〕』（有斐閣、2026）、『詳解 労働法〔第4版〕』（東京大学出版会、2025）、『労働法入門〔新版〕』（岩波書店、2019）、『集団の再生―アメリカ労働法制の歴史と理論』（有斐閣、2005）、『労働社会の変容と再生―フランス労働法の歴史と理論』（有斐閣、2001）、『パートタイム労働の法律政策』（有斐閣、1997）など

みずまち　ゆういちろう
水町　勇一郎

教授

法学部担当科目
英語

研究テーマ
エリザベス朝演劇

研究業績
Co-edited with R. Fielding and F. Konno, *Re-Imagining Shakespeare in Contemporary Japan* (Bloomsbury, 2021); co-authored with F. Konno, "The Shakespeare Company Japan and Regional Self-Fashioning," in *Bard Bites* (Edwaard Elgar, 2021).

もとやま　てつひと
本山　哲人

tetsum@waseda.jp

教授

法学部担当科目
環境法

研究テーマ
環境政策、環境法

研究業績
「続　中央省庁の政策形成過程」（2002年中央大学出版）、「里地からの変革」（1995年時事出版）、「人口減少時代に対応した持続可能な社会づくり」（2011年久留米大紀要）、「Citizen's participation in the process of policy-making and its implementation」（2003年East West Center）

もりもと　ひでか
森本　英香

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
損害賠償法、医事法

研究業績
『医療事故紛争の予防·対応の実務』（共著）、『賠償科学概説』（共著）、『ビジネス法務の基礎知識』（共著）、『交通賠償論の新次元』（共著）、「フランスにおける医療契約と医療被害救済制度」（年報医事法学21号）、「医療水準と法益」（賠償科学34号）

やまぐち　なりあき
山口　斉昭

教授

法学部担当科目
民法

研究テーマ
契約法・不法行為法

研究業績
『公序良俗論の再構成』（有斐閣、2000年）、『民法講義Ⅳ-1契約』（有斐閣、2005年）、『民法講義Ⅰ総則〔第3版〕』（有斐閣、2011年）、『契約法の現代化Ⅰ』（商事法務、2016年）、『契約法の現代化Ⅱ』（商事法務、2018年）、Grundzüge des japanischen Schadenersatzrechts, Jan Sramek Verlag, 2018、『契約法の現代化Ⅲ』（商事法務、2018年）、『契約解釈の構造と方法Ⅰ』（商事法務、2024年）、『憲法·民法関係論と公序良俗論』（信山社、2024年）

やまもと　けいぞう
山本　敬三

教授

法学部担当科目
比較憲法、導入演習、主専攻法学演習

研究テーマ
立法裁量とその統制手法

研究業績
『立法裁量と過程の統制』（単著、尚学社、2022年）、「憲法判断を含む判決とその事後処理」山本龍彦・白井誠・新井誠・上田健介編『国会実務と憲法』（日本評論社、2024年）、斎藤一久・堀口悟郎編『図録日本国憲法〔第3版〕』（分担執筆、弘文堂、2026年）、「職業の自由の規制の現代的問題」憲法問題34号（2023年）など

やまもと　まさひろ
山本　真敬

教授

法学部担当科目
ローマ法

研究テーマ
ローマ法

研究業績
『担保の歴史経営学』（共編著者、信山社、2024年）、『史料からみる西洋法史』（共編著者、法律文化社、2024年）、『キーコンセプト法学史―ローマ法・学識法から西洋法制史を拓く』（共編著者、ミネルヴァ書房、2024年）、La risoluzione consuetudinaria delle controversie in Giappone: il dibattito sulla mediazione in diritto comparato e storia del diritto, Annuario di Diritto Comparato e di Studi Legislativi, vol.14（2023）、「Tabulae Pompeianae Sulpiciorum 78に見る1世紀プテオリの取引と法の実像」ローマ法雑誌1号（2020）

みやさか　わたる
宮坂　渉

教授

法学部担当科目
フランス語／哲学・思想／教養演習

研究テーマ
フランス現代哲学・倫理学、精神分析理論

研究業績
著書：『浄土の哲学』『他力の哲学』（以上、河出書房新社）『ジャック・デリダと精神分析』『法』『脱構築』（以上、岩波書店）『存在と灰』（人文書院）『終わりなきバッション』（未来社）『反＝詩的文法』（思潮社）翻訳：デリダ『他者の単一言語使用』（岩波文庫）ドゥルーズ＆ガタリ『千のプラトー』（共訳、河出書房新社）など

もりなか　たかあき
守中　高明

morinaka@waseda.jp

准教授

もんでん　やすひろ
門田　康宏

法学部担当科目
中国語／中国近代文学

研究テーマ
中国近代文学、文体論

研究業績
「茅盾における西欧文学の受容」「巴金の文体」「主題からみる詩集の構造」

教授

法学部担当科目
応用民法Ⅲ／不動産登記法

研究テーマ
土地私法の諸問題

研究業績
『新しい債権法を読みとく』（商事法務、2017年）、『民法概論1民法総則』（第2版、有斐閣、2022年）、『土地法制の改革』（有斐閣、2022年）、『民法ー総則·物権』（第8版、有斐閣アルマ、2022年）

やまのめ　あきお
山野目　章夫

yamanome@waseda.jp

教授

法学部担当科目
導入演習／主専攻法学演習／倒産法Ⅰ・Ⅱ／民事訴訟法Ⅱ

研究テーマ
倒産法に関する諸問題

研究業績
『倒産法総合事例演習』（信山社、2025）、『プロセス講義倒産法』（信山社、共編、2023年）、『民事再生法の実証的研究』（商事法務、共編、2014）、「時期に関する非義務行為（期限前弁済）の否認における有害性」（『手続保障論と現代民事手続法』（信山社、2022）所収）、「再生計画不認可事由としての『不正の方法』」民事訴訟雑誌69号（2023年）

やまもと　けん
山本　研

yken@waseda.jp

教授

法学部担当科目
独語／西洋史／ジェンダー論

研究テーマ
ドイツ啓蒙主義、ジェンダー史、「人種」概念

研究業績
『入門　男らしさの歴史』（筑摩書房、2025）、『はじめての西洋ジェンダー史』（山川出版社、2021）、『啓蒙の世紀と文明観』（山川出版社、2004）、『ジェンダーのとびらを開こう』（共著、大和書房、2022）、『ジェンダード·イノベーションの可能性』（共編、明石書店、2024）

ゆげ　なおこ
弓削　尚子

yuge@waseda.jp

ラーデマッハ クリストフ

教授

法学部担当科目
知的財産権法
国際法律実務

研究テーマ
特許法、知的財産権法、
国際ビジネス法

研究業績
デザイン保護法制の現状と課題―法学と創作の視点から―（共編者、日本評論社、2016年）、Patent Enforcement in the US, Germany, and Japan（共著者、Oxford University Press、2015年）、Die gerichtliche Durchsetzung von Patentund Markenrechten in Deutschland, Japan, und den USA（Nomos出版（ドイツ）、2010年）

rademacher@waseda.jp　http://www.rclip.jp/organization.html

渡辺（わたなべ）　徹也（てつや）

教授

法学部担当科目
租税法

研究テーマ
法人税

研究業績
『企業取引と租税回避』（中央経済社、2002）、『企業組織再編成と課税』（弘文堂、2006）、『ベーシック税法（第7版）』（有斐閣、2013）、「プラットフォームワーカー・ギグワーカーと課税」ジュリスト1572号（2022）、『スタンダード法人税法〔第3版〕』（弘文堂、2023）、「信託型ストック・オプションに関する租税法上の解釈問題」『市場・国家と法』（有斐閣、2024）、「生成AIと課税―ロボット課税からAI利用へ―」フィナンシャル・レビュー 157号（2024）、『インセンティブ・バーゲニングと企業法』（商事法務、2025）、『法人税法の討究』（成文堂、2025）

和仁（わに）　かや

教授

法学部担当科目
日本法史

研究テーマ
近世日本法制史

研究業績
『江戸の刑事司法―「御仕置例類集」を読みとく―』（筑摩書房、2025年）、『岡松参太郎の遺緒』（成文堂（共編）、2024年）、「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」（『早稲田大学法学会百周年記念論文集』（2022年）所収）、「『琉球科律』―近世琉球の成文法典―」神戸学院法学40巻1号（2010年）

若林（わかばやし）　泰伸（やすのぶ）

教授

法学部担当科目
法学演習（商法）／外国書購読（欧米の金融市場規制）

研究テーマ
証券発行市場規制、公共債の市場法的研究

研究業績
「証券発行市場と相場操縦規制（1）－（9・完）」法研論集91号－96号・98号、102・103号（1999－2002年）、「監査人に対する虚偽表示・不当な圧力行使の禁止」デイスクロージャー＆IR・13号（2020）、「公開会社における取締役・執行役の資格に関する基礎的考察（1）（2・完）」Law＆Practice15号・18号（2021・2025）

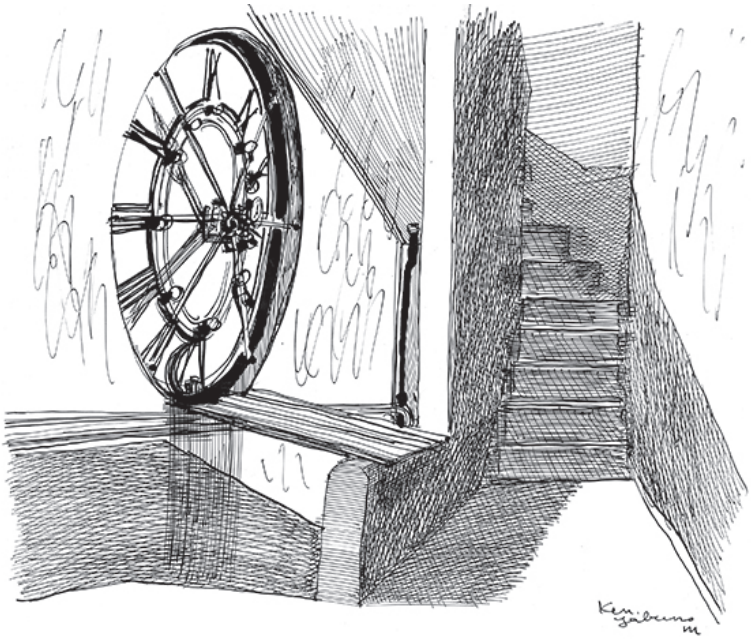
渡部（わたなべ）　美由紀（みゆき）

教授

法学部担当科目
民事訴訟法Ⅰ／主専攻法学演習（民事訴訟法）

研究テーマ
民事訴訟法、仲裁法

研究業績
『NBS民事訴訟法』（共著、日本評論社、2016年）、『ゼミナール民事訴訟法』（共著、日本評論社、2020年）、「家事審判の既判力」（徳田和幸先生古稀祝賀記念論文集『民事手続法の現代的課題と理論的解明』〔弘文堂、2017年〕所収）、“Due Process in Arbitration-How to Mitigate Due Process Paranoia”, Japan Commercial Arbitration Journal, Vol.5（2024）など



「早稲田大学法学部報」Themis 第45号

発行日：2026年４月1日
発行所：早稲田大学法学部
〒169-8050　東京都新宿区西早稲田1-6-1
TEL：03（3232）4534
URL：https://www.waseda.jp/folaw/law/
カット・画：藪野　健　早稲田大学栄誉フェロー

発　行　者：法　学　部　長　　田村 達久
編　集　者：法学部学生担当教務副主任　　橋本 有生

WASEDA UNIVERSITY